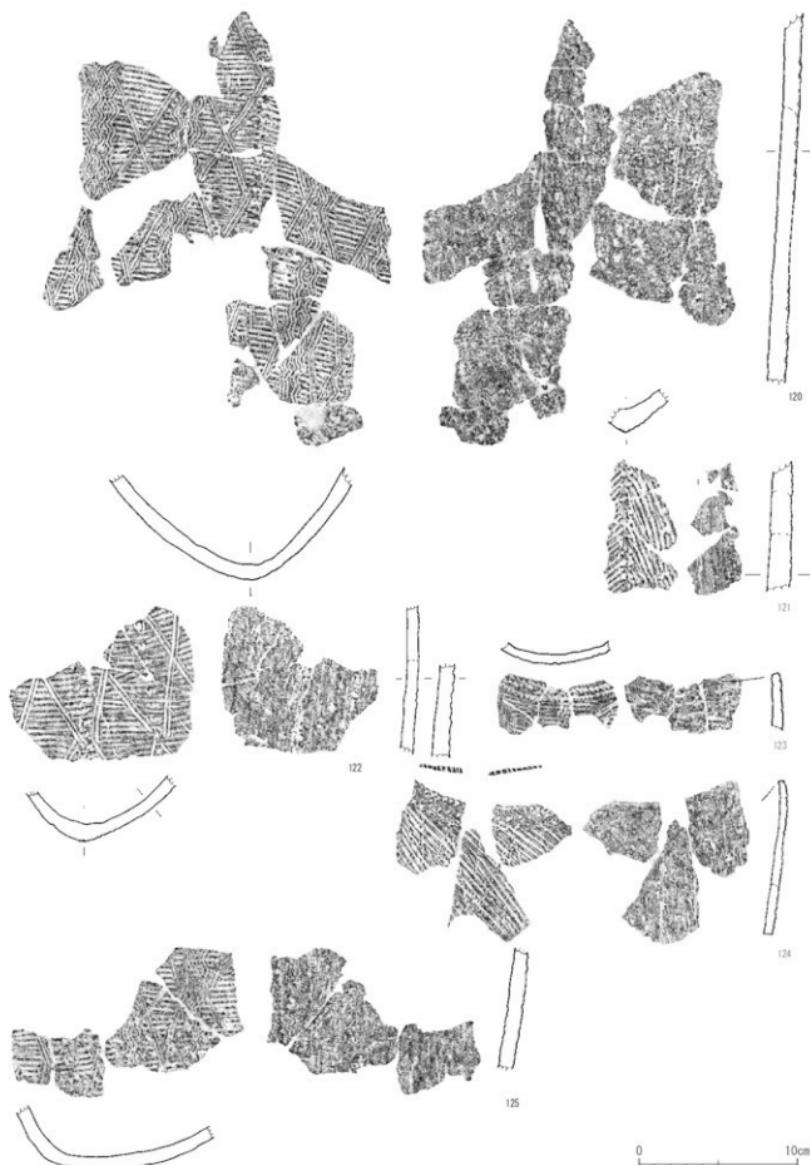


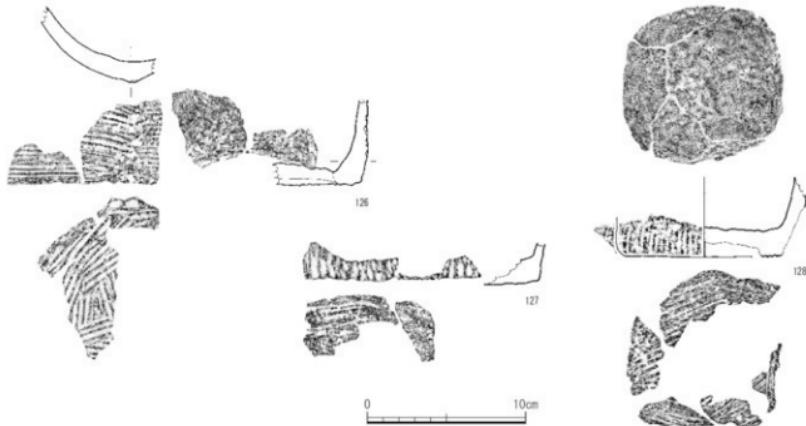
0 10cm

第201図 繩文早期土器実測図 (13) (1.42群土器/桐木調査区出土)

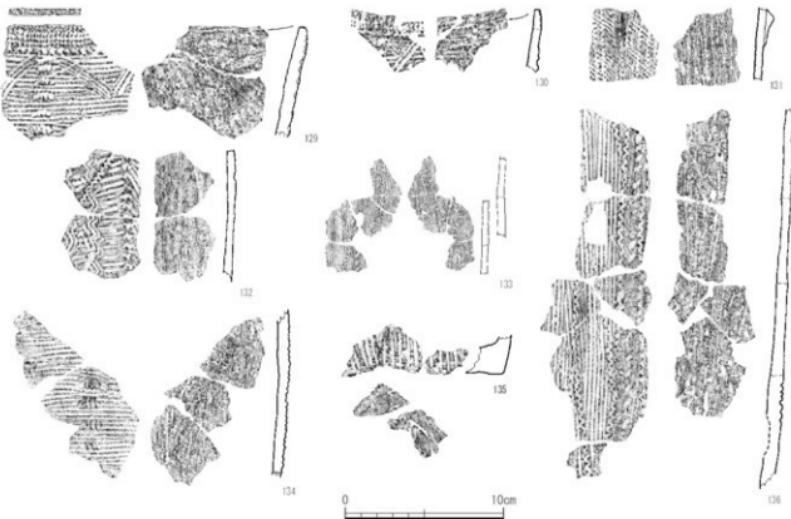




第203図 縄文早期土器実測図 (15) (1.43群土器/桐木調査区出土)



第204図 縄文早期土器実測図(16) (1.43群土器/桜木調査区出土)



第205図 縄文早期土器実測図(17) (1.44群土器/桜木調査区出土)



第206図 縄文早期土器実測図(18) (1.44群土器/耳取調査区出土)

れ、特に多量の角閃石を含有していた。

さて出土分布図からは、耳取調査区北側地区のうち、特に耳取調査区I・J-7～9区周辺に集中していることを指摘できる(第184図、第185図～第188図参照)。この分布域は第1群土器第2類土器や第1群土器第4類土器の主たる分布域とは異なることがある。

ここで注目できるのは、本類に属する土器は第2類土器と第4類土器との過渡期に位置付けられる土器群と考えられる可能性が指摘できることである。

すなわち、本類に属する土器は、從来、第1群土器第2類土器に分類される土器であった。しかし、本遺跡では第1群土器第2類土器とは明らかに主たる分布域が大きく異なることや、施文的特徴では第1群土器第2類土器と第1群土器第4類土器との折衷的特徴を示すことなどが指摘できる。さらに、施文的特徴以外の諸属性では共通する特徴を有していることが挙げられる。以上のことから、第1群土器第3類土器は第2類土器と第4類土器との過渡期の土器群として、本報告では細別を試みた。なお、本類に属する土器の点数が少ないために、径の大きさの違いによる細別はできなかった。

第1群土器第4類土器(分類記号1.4、第199図～第206図98～137)

第1群土器第4類土器に属する土器を40点資料化した。

器形的特徴としては、円筒形土器と角筒形土器とレモン形を呈する土器とがあり、円筒形土器を第1タイプ土器(分類記号1.41、第199図98～111)に、角筒形土器を第2タイプ土器(分類記号1.42、第200図～第202図112～119)に、レモン形を呈する土器を第3タイプ土器(分類記号1.43、第203・204図120～128)に、形状が不明な土器を第4タイプ土器(分類記号1.44、第205・206図129～137)に分類した。

全般的な器形では、口縁部が直行し、胴部から底部までは直線的で、底部は平底を呈する深鉢形土器で、口唇部は平坦面を形成する特徴を指摘できる。また、底部から立ち上がる胴部下端部の器壁の厚さが極端に薄いことも特徴の一つに挙げることができる。さらに、円筒形土器の口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は直線的に外に開く形態であるのに対して、角筒形土器の口縁形態は波状口縁を呈し、口縁部は直行する形態である特徴を有している。

施文的特徴としては、口唇上端部には刻みを施し、口縁部文様帶外面には貝殻刺突文を横位方向に2条もしくは3条巡らし、胴部文様帶では胴部下端部外面にかけて斜位方向の貝殻条痕文を地文としてその上に、斜位方向あるいは縦位方向の貝殻刺突文を重ねて施すことが指摘できる。また、胴部下端部では縦位方向の刻みを施すのが一般的である。

ここで注目できる点として2点挙げができる。

第1に、角筒形土器やレモン形を呈する土器の中には、胴部文様帶では胴部下端部外面にかけて、貝殻条痕文に重ねて施文する貝殻刺突文に加えて、さらに流水状の貝殻条痕文を縦位方向に重ねる土器や、角の部分に貝殻腹縫部による押引文を縦位方向に施す土器がみられることを指摘できる。

第2に、角筒形土器の中には口縁部文様帶外面に縦位方向の貝殻刺突文を1列ないしは2列巡らす土器(113、115)がみられるなどを指摘できる。この種の土器は3号住居内でも出土している。

以上の特徴から本類に属する土器は、鹿児島県鹿児島市加葉山遺跡出土土器を標識とする加葉山式土器に比定できる。

さて施文的特徴における特異的な例としては、第199図107を挙げることができる。この土器は、胴部文様帶外面に貝殻条痕文に重ねて施文する縦位方向の貝殻刺突文を、極端に密接して施す円筒形土器である。類例としては、鹿児島県指宿市小牧3A遺跡を挙げることができる。前追壳一により小牧3Aタイプに分類された。今後注意を要する土器である。

調整方法としては、内器面では、口縁部から底部にかけて箋状工具による縦位方向あるいは斜位方向のケズリ調整後に粗いナデ調整を行う土器が多数を占めた。その他に、ケズリ調整を最終調整としている土器も多くみられた。しかし、第1群土器第2類土器にみられた最終調整として丁寧なナデ調整やミガキに近いナデ調整を行い、それ以前の調整の痕跡が観察できなかっただけで、土器は見受けられなかった。

本類土器の胎土中鉱物は、主に角閃石や輝石などで構成されており、特に角閃石が多量に含有する土器が多く観察できたことと、角筒形土器には胎土が精選されていた土器や赤色粒を多く含む土器が多かったことが注目できた。

胎土中鉱物における特異的な例としては、第202図119を挙げることができる。本類土器のうち1点だけではあるが、黒雲母を特に多く含む土器であり、混和材として含ませた可能性の高いことが特記できる。

さて出土分布図からは、耳取調査区南側地区のうち、特に耳取調査区I・J-18・19区周辺と、桐木調査区北側地区的うち、特に桐木調査区C～G-5～9区周辺に集中していることを指摘できる(第184図、第185図～第188図参照)。

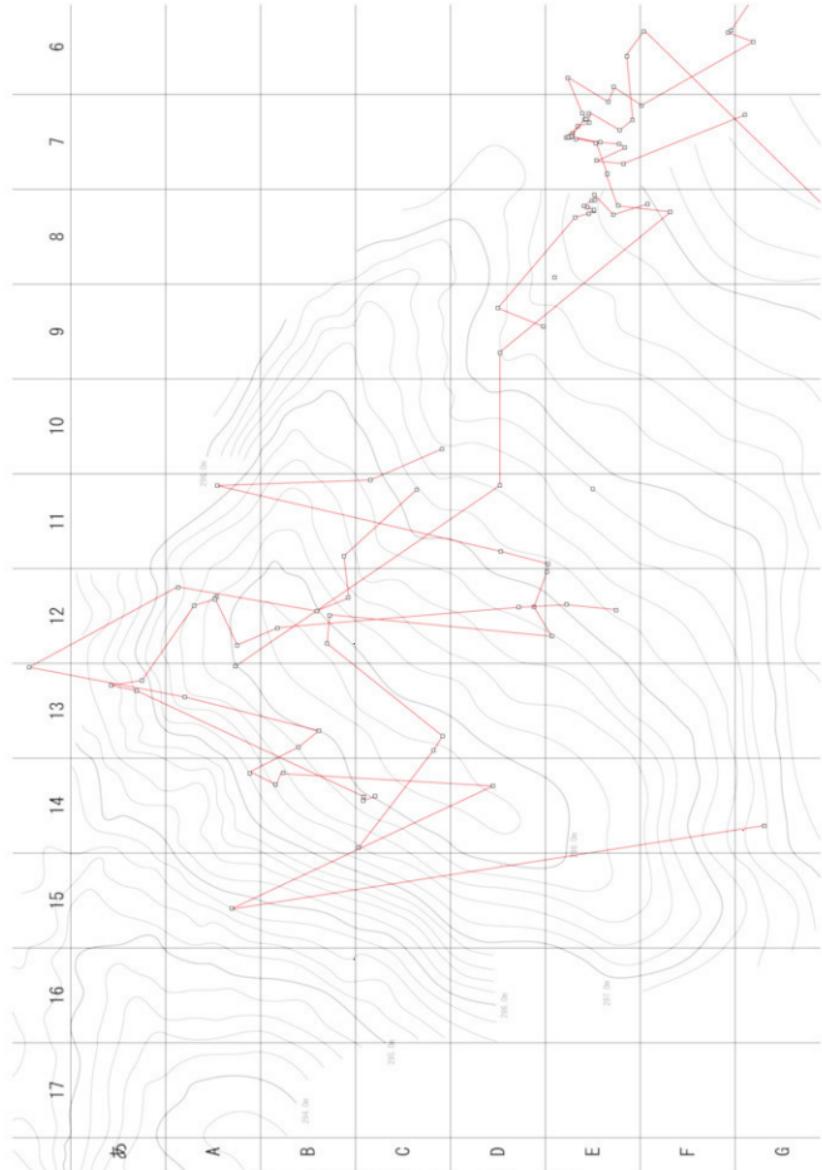
出土状況における特徴的な点として、円筒形土器のうち、口縁部にくさび状の突起を縦位方向に貼付する土器は、耳取調査区南側地区に集中している状況が見られることが挙げられる。分布域が限定され出土することは、時期差を示している可能性もあり、今後注意を要する土器である。

## 第2群土器(第210図～第212図138～147)

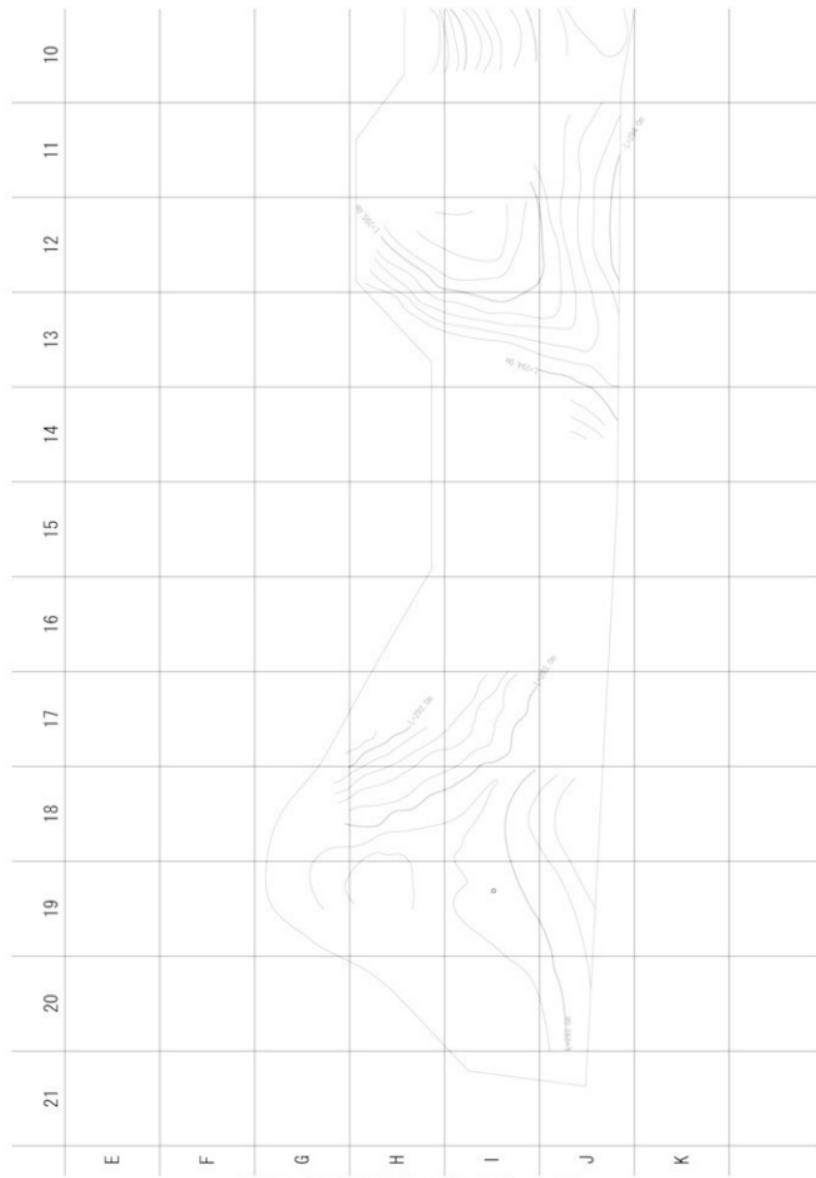
第2群土器に属する土器は、その施文的特徴および器形的特徴からも分類を行うことはできなかった。本群に属する土器は層位的にはⅥ層とⅦ層とを中心に出土しているが、より上層のⅥ層やⅦ層から出土した土器片との接合もみられるところから、地層の横転や後世の埋乱が激しかったことが認められる。第2群土器に属する土器を10点資料化した。

器形的特徴としては、口唇部は平坦面を形成し、口縁部は外反し、口縁部から胴部まで直線的で、平底の底部を呈する円筒形深鉢形土器であることが挙げられる。

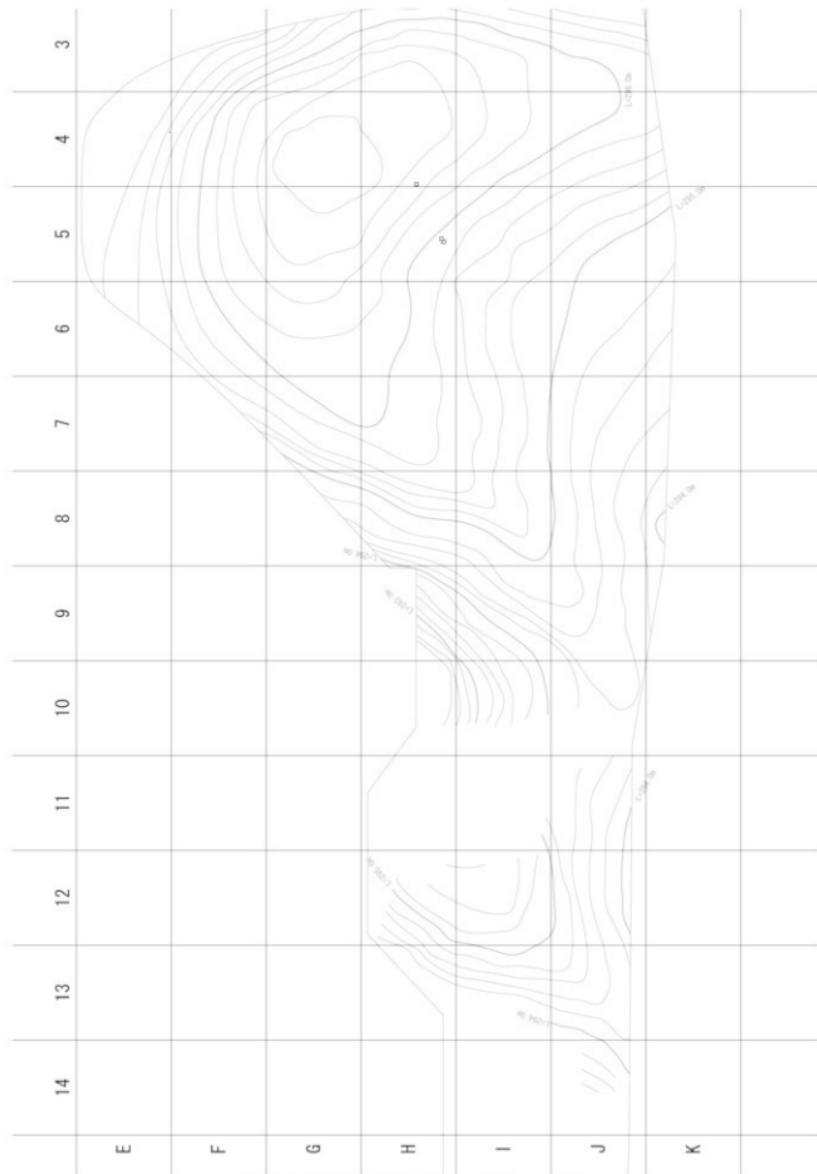
本遺跡では本群土器は径の大きさの異なる土器が2種類出土した。すなわち口径20cm強、底径15cm強を測る土器(第210・211図139、140、141、143)と、口径15cm弱、底径10cm強を



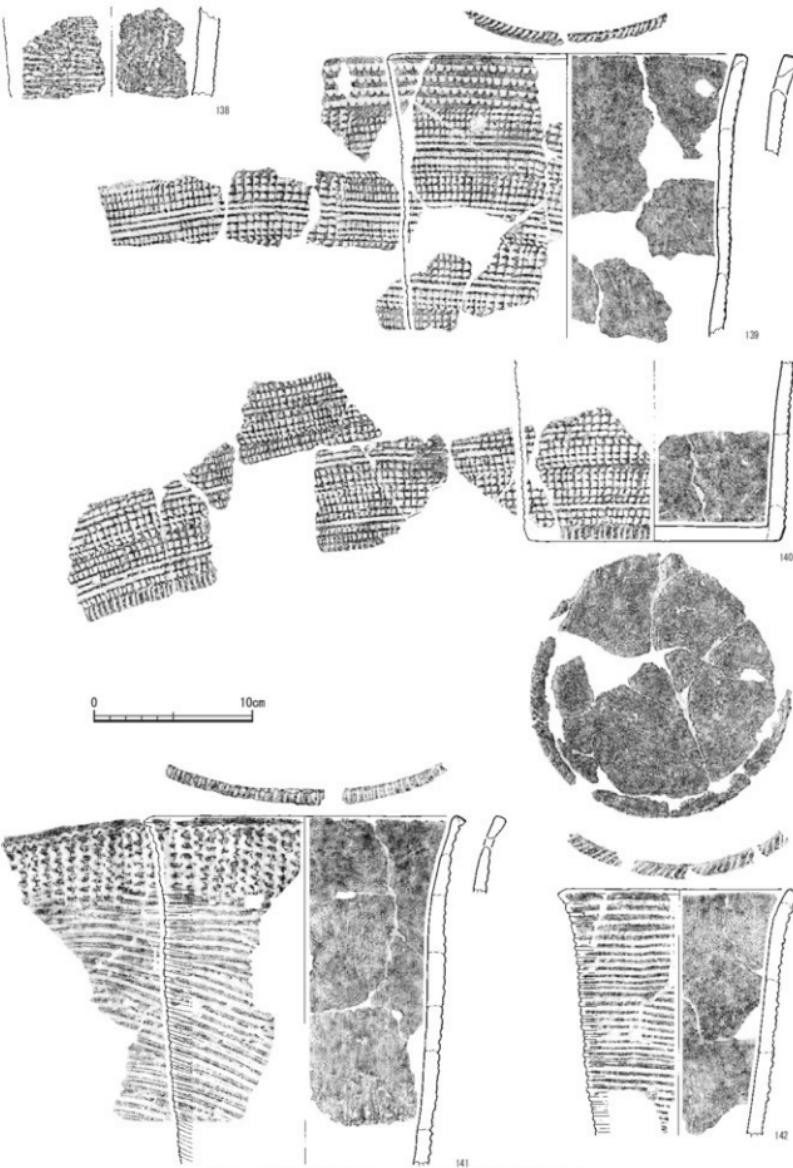
第207図 縄文早期土器分布図10 (第2群土器 1, 1/500)



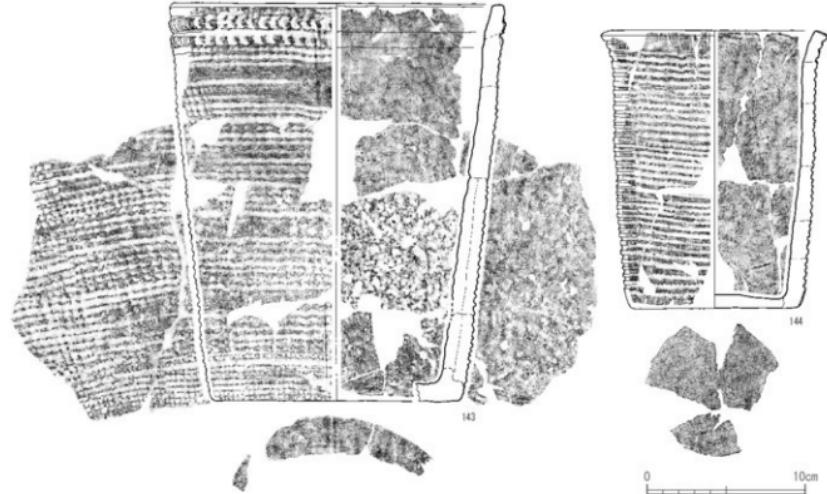
第208図 縄文早期土器分布図11（第2群土器2. 1/500）



第209図 純文早期土器分布図12 (第2群土器3, 1/500)



第210図 純文早期土器実測図(19) (2群土器/桐木調査区出土)



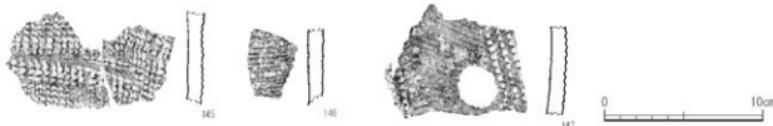
第211図 縄文早期土器実測図(20) (2群土器/朽木調査区出土)

第51表 縄文早期土器観察表(9) (2群土器-1)

標識	面番	分類	取扱い(テテ×テテ)	胎土	調査(内)	調査(外)	備考
210 118 2		01810 (1-12, 壁)	陶, 錐目	クスリナード	-	-	
210 119 2		01813 (6-9, 壁) 01861 (1-9, 壁) 01862 (1-10, 壁) 01864 (1-7, 壁) 01864 (4-6, 壁) 01865 (1-7, 壁) 01865 (2-7, 壁) 01866 (1-7, 壁) 01866 (1-8, 壁) 01866 (3-7, 壁) 01867 (1-7, 壁) 01868 (1-7, 壁) 01869 (1-7, 壁) 01870 (1-7, 壁) 01871 (1-7, 壁) 01872 (1-7, 壁) 01873 (1-7, 壁) 01874 (1-7, 壁) 01875 (1-7, 壁) 01876 (1-7, 壁) 01877 (1-7, 壁) 01878 (1-7, 壁)	錆, 台形	ナデ, 直ハケーナデ	ナデ	足和村 葛西原	
210 120 2		01814 (6-9, 壁) 01861 (1-9, 壁) 01862 (1-10, 壁) 01863 (1-7, 壁) 01864 (1-7, 壁) 01864 (4-6, 壁) 01865 (1-7, 壁) 01866 (1-7, 壁) 01867 (1-7, 壁) 01868 (1-7, 壁) 01869 (1-7, 壁) 01870 (1-7, 壁) 01871 (1-7, 壁) 01872 (1-7, 壁) 01873 (1-7, 壁) 01874 (1-7, 壁) 01875 (1-7, 壁)	錆, 台形	直ハケーナデ, ナデ	-	-	
210 140 2		01817 (1-7, 壁) 01844 (1-7, 壁) 01845 (1-7, 壁) 01846 (1-7, 壁) 01847 (1-7, 壁) 01848 (1-7, 壁) 01849 (1-4, 壁) 01850 (1-7, 壁) 01851 (1-7, 壁) 01852 (1-7, 壁) 01853 (1-7, 壁) 01854 (1-7, 壁) 01855 (1-7, 壁) 01856 (1-7, 壁) 01857 (1-7, 壁) 01858 (1-7, 壁) 01859 (1-7, 壁) 01860 (1-7, 壁)	砂粒, 黒	直ハケーナデ, ナデ	-	-	
210 141 2		01866 (1-7, 壁) 01867 (1-7, 壁) 01868 (1-7, 壁) 01869 (1-7, 壁) 01870 (1-7, 壁) 01871 (1-7, 壁) 01872 (1-7, 壁) 01873 (1-7, 壁) 01874 (1-7, 壁) 01875 (1-7, 壁) 01876 (1-7, 壁)	錆, 錠, 錐目	直ケヌリ+工具柄ナデ	-	錆丸孔, 直ハケーナデ, 内径3cm, 外径7cm	

第52表 縄文早期土器観察表(10) (2群土器-2)

標識	面番	分類	取扱い(テテ×テテ)	胎土	調査(内)	調査(外)	備考	
210 142 2		01751 (6-12, 壁) 01752 (6-12, 壁) 01753 (6-12, 壁) 01754 (6-12, 壁) 01755 (6-12, 壁) 01756 (6-12, 壁) 01757 (6-12, 壁) 01758 (6-12, 壁) 01759 (6-12, 壁) 01760 (6-12, 壁) 01761 (6-12, 壁) 01762 (6-12, 壁) 01763 (6-12, 壁) 01764 (6-12, 壁) 01765 (6-12, 壁) 01766 (6-12, 壁)	錆, 錠, 錐目	直ハケーナデ	ナデ	-	-	
210 143 2		01757 (1-12, 壁) 01758 (1-12, 壁) 01759 (1-12, 壁) 01760 (1-12, 壁) 01761 (1-12, 壁) 01762 (1-12, 壁) 01763 (1-12, 壁) 01764 (1-12, 壁) 01765 (1-12, 壁) 01766 (1-12, 壁) 01767 (1-12, 壁) 01768 (1-12, 壁) 01769 (1-12, 壁) 01770 (1-12, 壁) 01771 (1-12, 壁) 01772 (1-12, 壁)	錆, 錠, 錐目	直ハケーナデ	-	-		
210 144 2		01771 (1-12, 壁) 01772 (1-12, 壁) 01773 (1-12, 壁) 01774 (1-12, 壁) 01775 (1-12, 壁) 01776 (1-12, 壁) 01777 (1-12, 壁) 01778 (1-12, 壁) 01779 (1-12, 壁) 01780 (1-12, 壁) 01781 (1-12, 壁) 01782 (1-12, 壁) 01783 (1-12, 壁) 01784 (1-12, 壁) 01785 (1-12, 壁)	錆, 錠, 錐目	直ハケーナデ	-	-		
210 145 2		▲12258 (5-7, 壁) ▲12259 (5-7, 壁)	錆, 錠, 錐目	直ハケーナデ	ナゲトに近い丁寧なナデ	-	足和村 葛西原	
210 146 2		▲12260 (4-10, 壁上)	錆, 錠, 錐目	斜直鉈多様	-	-		
210 147 2		▲12261 (1-18, 壁)	錆, 錠, 錐目	直ハケーナデ	-	新町 佐多		



第212図 縄文早期土器実測図 (21) (2群土器/耳取調査区出土)

測る土器(第210・211図142, 144)である。しかし出土点数が少なく、一般的な現象なのかあるいは本遺跡に特異的な現象なのかを明らかにすることが出来ず、第1群土器第2類土器のように形式分類を行うには至らなかった。

また、一般的な施文的特徴としては、口唇部には縦位方向の刻みを巡らし、脣部文様帯には横位方向に數条の貝殻押引文と數条の貝殻条痕文とを交互に施し、脣部下端部には縦位方向の刻みを施すことが指摘できる。特に、口縁部文様帯や脣部文様帯では文様構成が多様なことは注目できる。

また、口縁部文様帯では4種類の文様構成が確認できる。

第1種は、横位方向に貝殻刺突文を數条巡らす土器(第210図139, 142)である。

第2種は、口縁部文様帯上端部に横位方向の貝殻刺突文を1条巡らした下位に、縦位方向の貝殻刺突文を連続して横位方向に施す土器(第210図141)である。

第3種は、口縁部文様帯上端部に施される横位方向の貝殻刺突文が消失し、縦位方向の半載竹管状の工具による「C」字状の刺突文を2条巡らす土器(第211図143)である。

第4種は、口縁部文様帯の貝殻刺突文が消失し、脣部文様帯に施される文様構成である横位方向の貝殻押引文が口縁部文様帯にも施される土器(第211図144)である。

また、脣部文様帯に施される貝殻押引文には2種類の文様構成が確認できる。

第1種は、施文の深さが深く貝殻押引文であることが明瞭な土器である。

第2種は、施文の深さが浅く施文下場でようやく貝殻押引文であることが確認できる土器である。

本遺跡では本群に属する土器は若干しか出土しておらず、口縁部文様帯から脣部文様帯にかけて施される文様構成の差が、時期差を示すものか、個体差などを示すものかを明らかにできなかった。

以上の特徴から本類に属する土器は、鹿児島県吉田町大原遺跡出土土器を標準とする吉田式土器に比定できる。

調整方法としては、内面面では斜面ないしは横位方向の木製工具によるハケ調整の後に、ナデ調整もしくは丁寧なナデ調整やミガキに近い丁寧なナデ調整を行なう土器が多く観察できた。しかし第1群土器で数多く観察できたケズリ調整が器面に痕跡として残された土器は少なかった。また底面外面にはナデ調整が施される。

本群土器の胎土中鉱物は、主に黒雲母や輝石などで構成される土器と、角閃石などで構成される土器とが観察できた。また特に、黒雲母を多量に含む土器が観察できたことや、細かい粒度の鉱物で構成された土器と粗い粒度の鉱物を含む土

器など、同一型式の中で製作方法が異なる土器が確認できることは注目できる。

さて出土分布図からは、耳取調査区南側地区のうち、特に耳取調査区I-19区周辺と、桐木調査区北側地区のうち、特に桐木調査区I-G-6~15区周辺とに集中していることを指摘できる(第207図~第209図参照)。

## 第2群土器小結

本群に属する土器と同様の土器が多数出土している遺跡としては、鹿児島県根占町大中原遺跡を挙げることができる。

大中原遺跡においても、本遺跡の口縁部文様帯第1種・第2種・第3種と同様の文様構成が行われている土器が出土している。すなわち、口縁部文様帯第1種は大中原8類土器に、口縁部文様帯第2種は大中原5類土器に、口縁部文様帯第3種は大中原7類土器に、比定できる。

また大中原遺跡では、大中原5類土器と、大中原7類土器と、大中原8類土器とでは出土分布域が異なる傾向のあることが確認されている。

ただし、本遺跡における口縁部文様帯第4種に属する、口縁部文様帯の貝殻刺突文が消失し、脣部文様帯に施される横位方向の貝殻押引文が、口縁部文様帯にも施される土器は、大中原遺跡では出土していないことが指摘できる。

本群土器の細別が時間差による違いなのか、種類の豊富さを示しているのか、今後注意を要する土器である。

## 第3群土器(第220図~第244図148~337)

第3群土器に属する土器は、その施文的特徴および器形的特徴から、さらに5類9タイプ18種に分類できた。なお本群土器の器形は全て円筒形土器である。

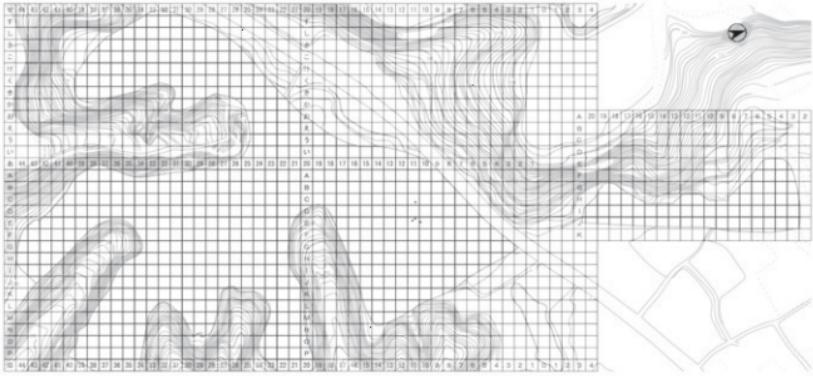
本群に属する土器は層位的にはⅤ層とⅥ層とを中心に出土しているが、より上層のⅥ層やⅦ層から出土した土器片との接合もみられることから、地層の横転や後世の搅乱の激しさが認められる。

さて、出土分布図から本群に属する土器は主に、桐木調査区北側地区的うち、特に桐木調査区B~I-6~12区周辺に集中していることを指摘できる(第213図~第219図参照)。

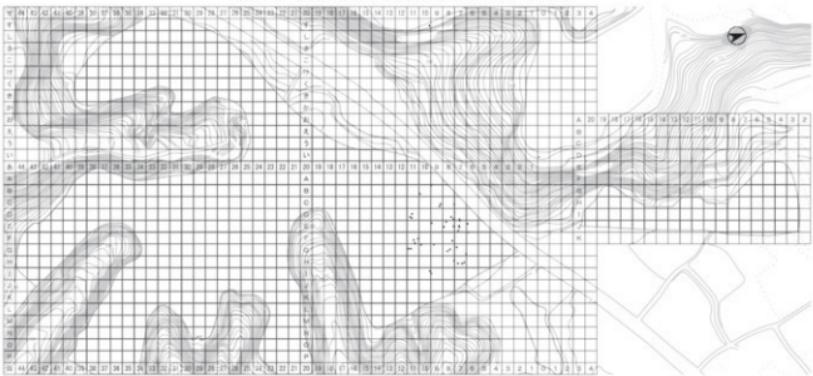
第3群土器第1類土器(分類記号3.1、第220図~第234図148~256、第236図266~267、第240図~第244図279~337)

第3群土器第1類土器に属する土器を170点資料化した。

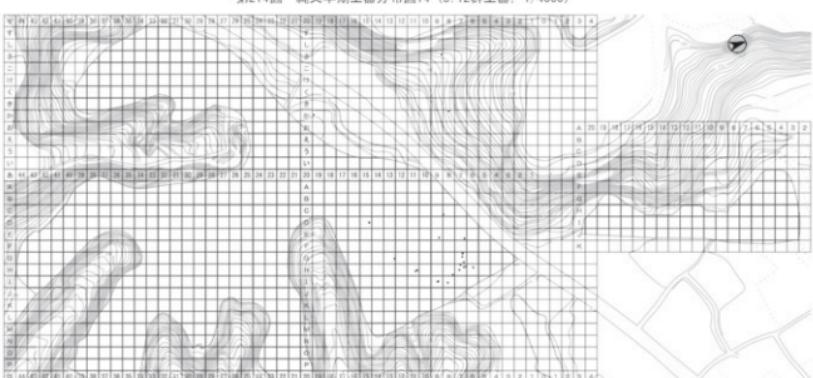
器形的特徴としては、口縁部は外反もしくは直行し、脣部は中央部でやや膨らむか、あるいは直線的な脣部形態を呈する円筒形で、底部は平底であることが挙げられる。



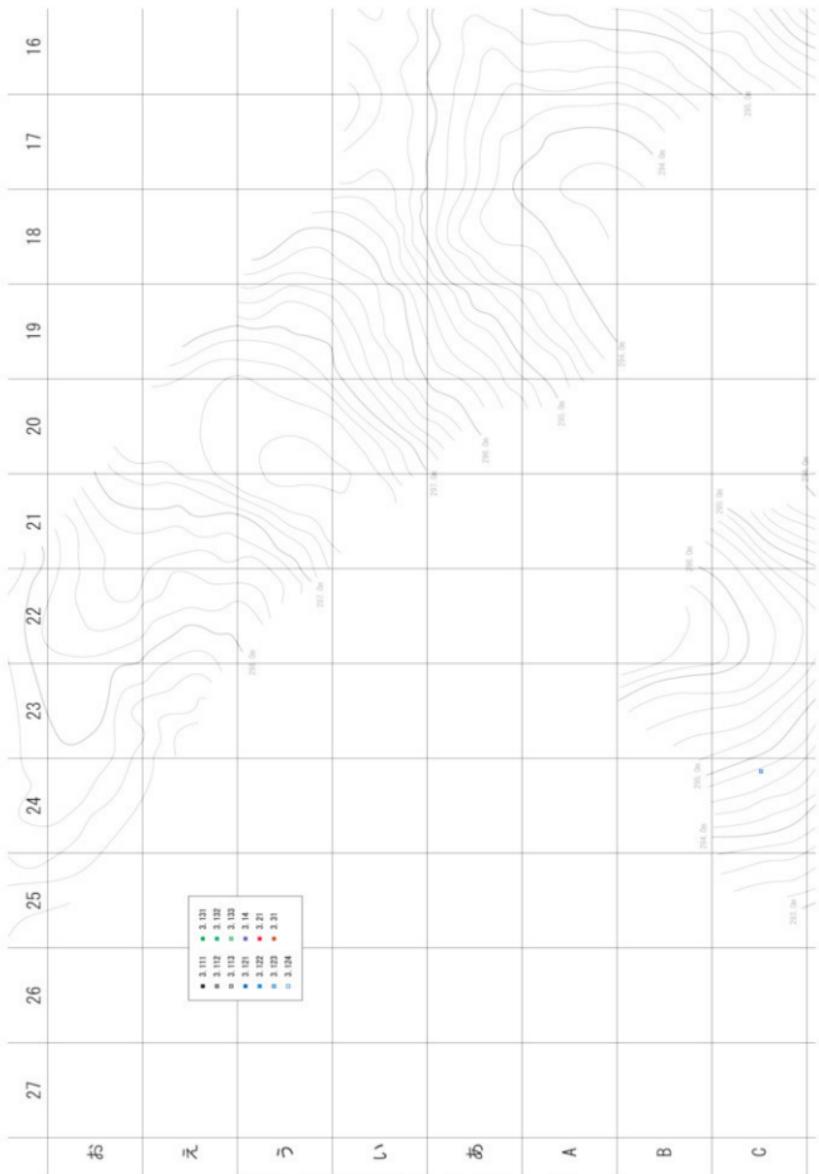
第213図 繩文早期土器分布図13 (3.11群土器, 1/4000)



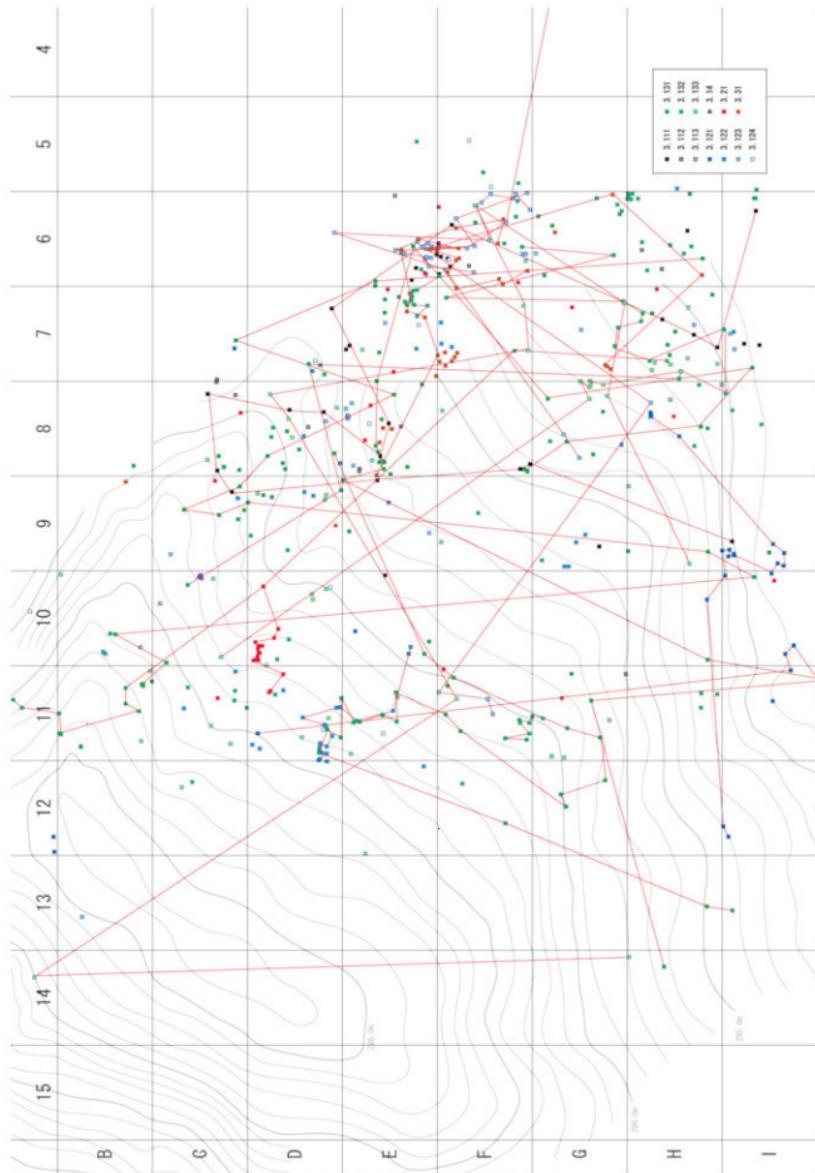
第214図 繩文早期土器分布図14 (3.12群土器, 1/4000)



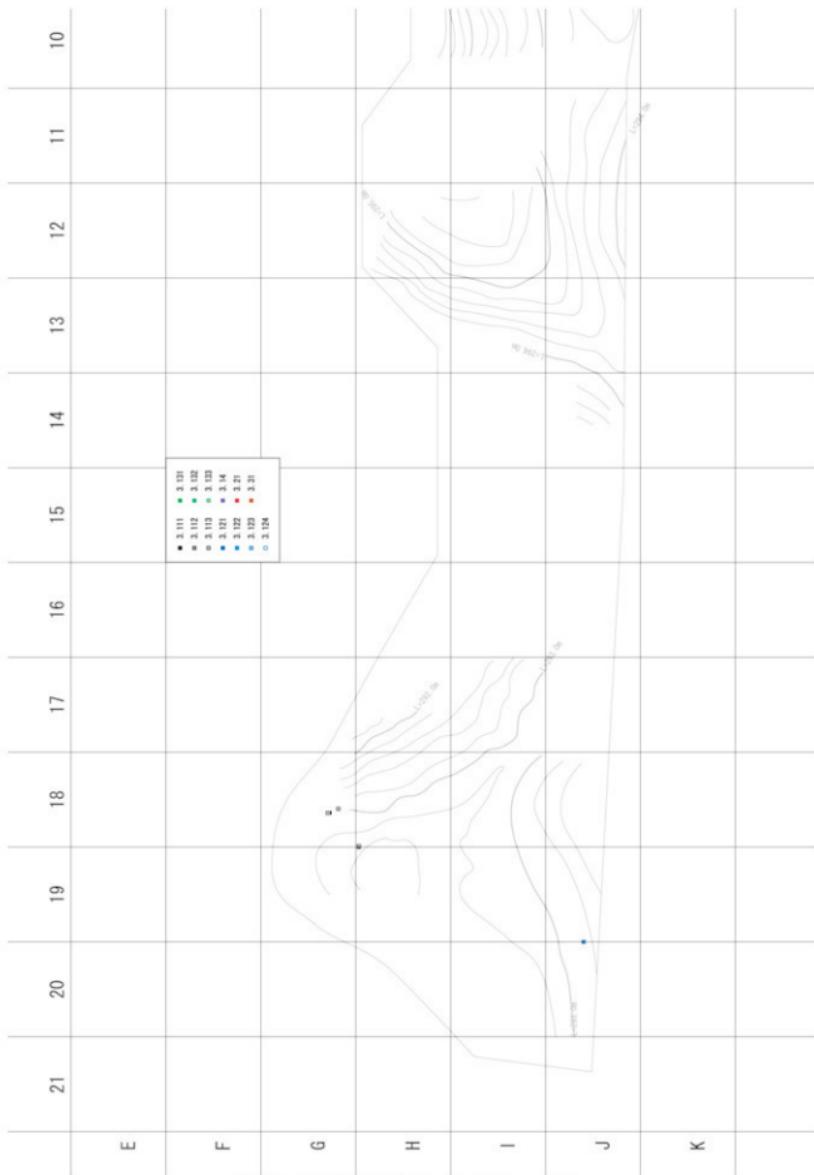
第215図 繩文早期土器分布図15 (3.13群土器, 1/4000)



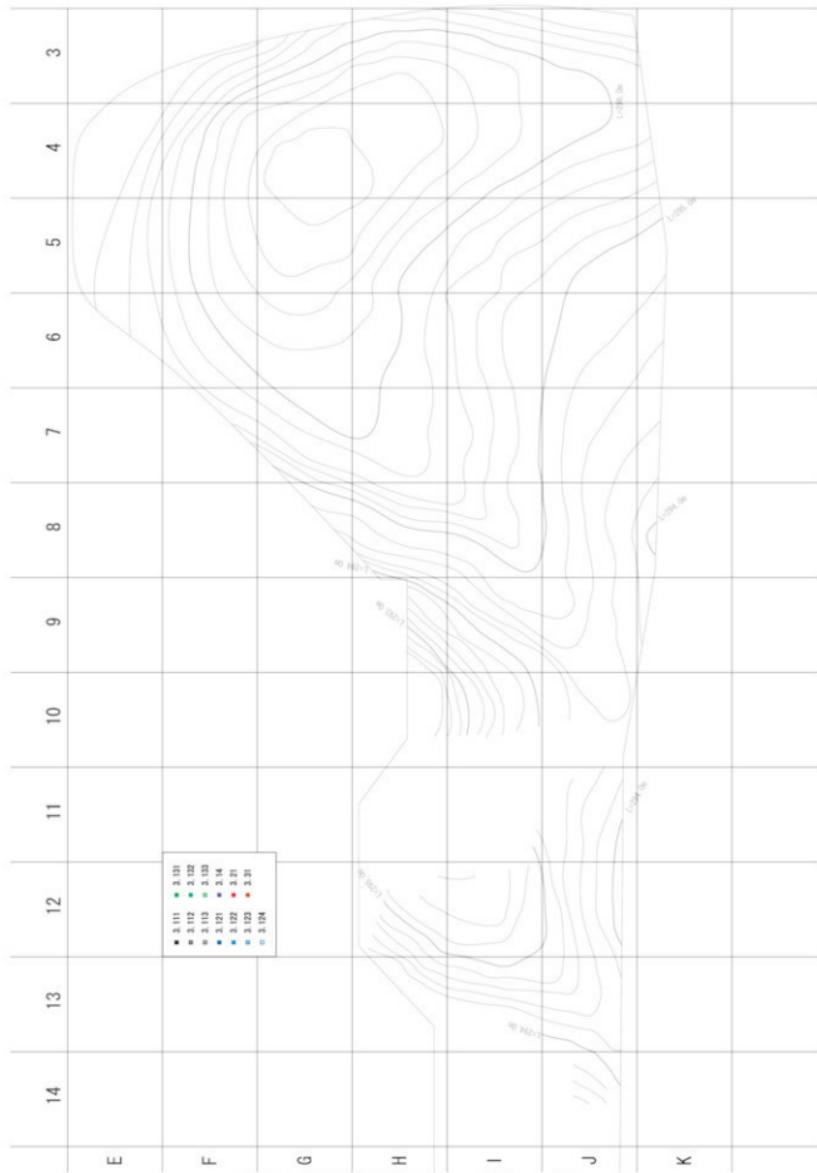
第216図 縄文早期土器分布図16（第3群土器 1. 1/500）



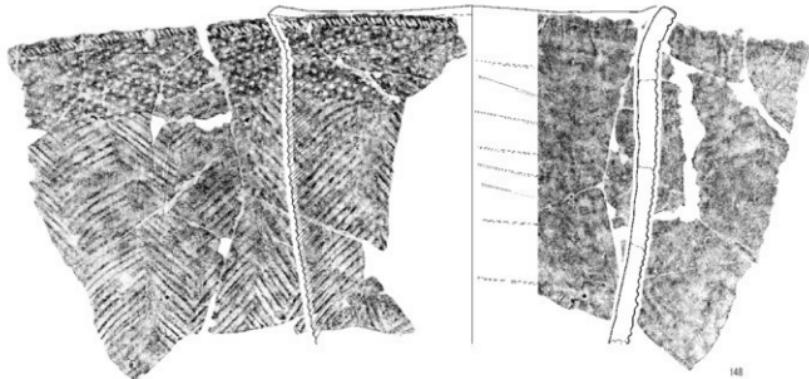
第217図 縄文早期土器分布図17（第3群土器2. 1/500）



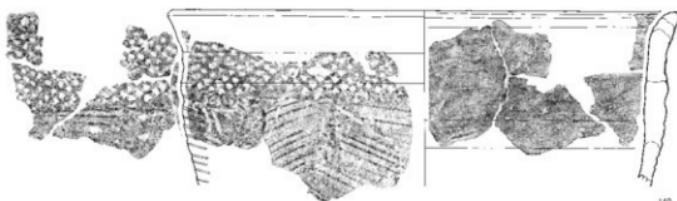
第218図 純文早期土器分布図18（第3群土器 3. 1/500）



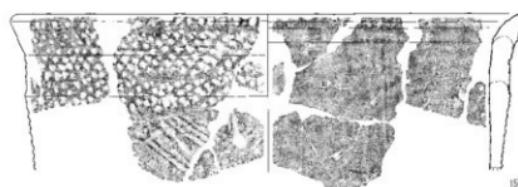
第219図 純文早期土器分布図19（第3群土器4, 1/500）



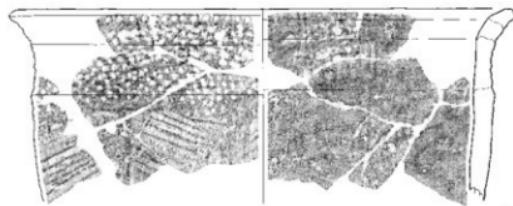
148



149



150

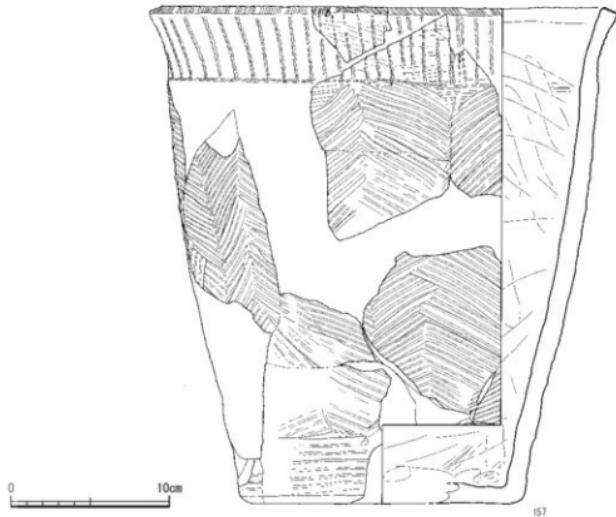


151

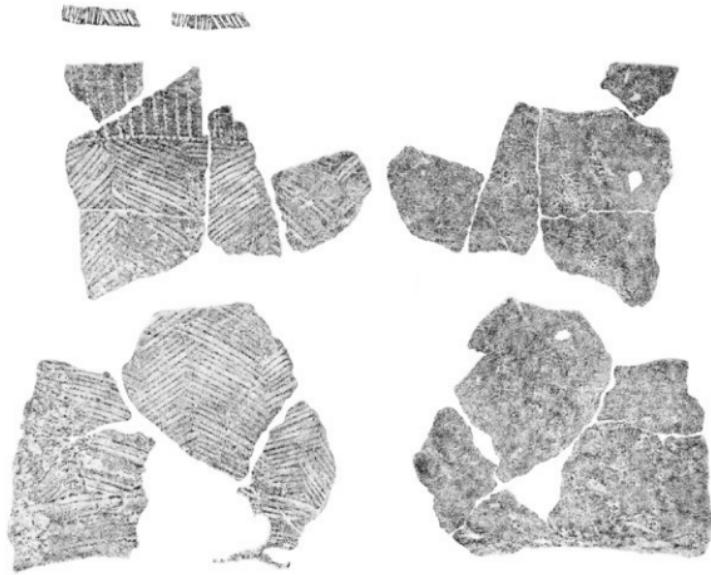


第220図 純文早期土器実測図(22) (3. 111群土器/桐木調査区出土)

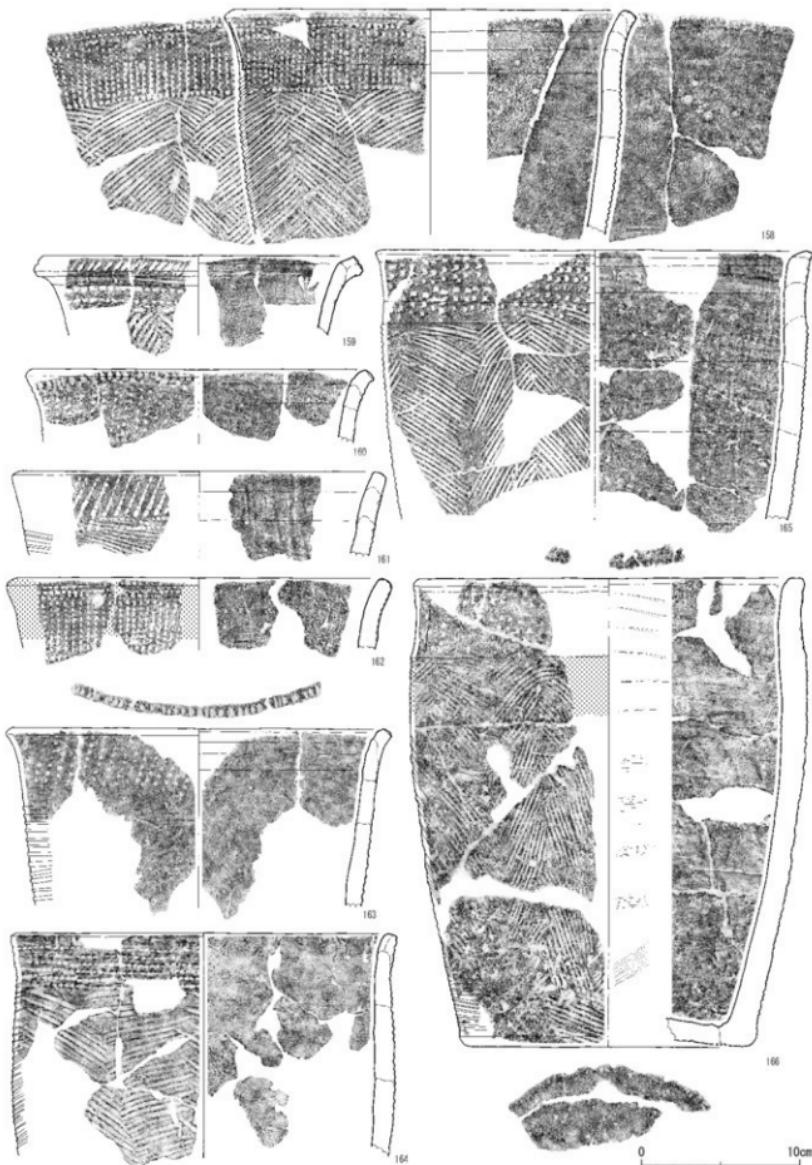




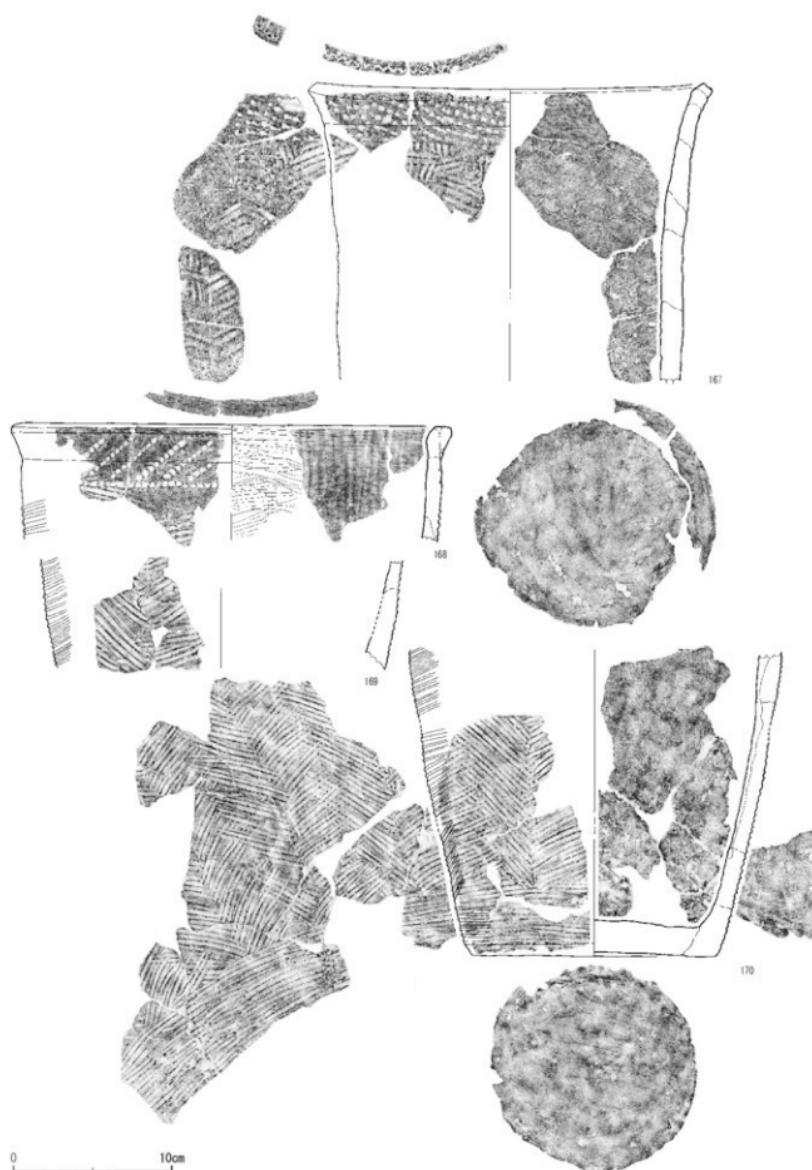
157



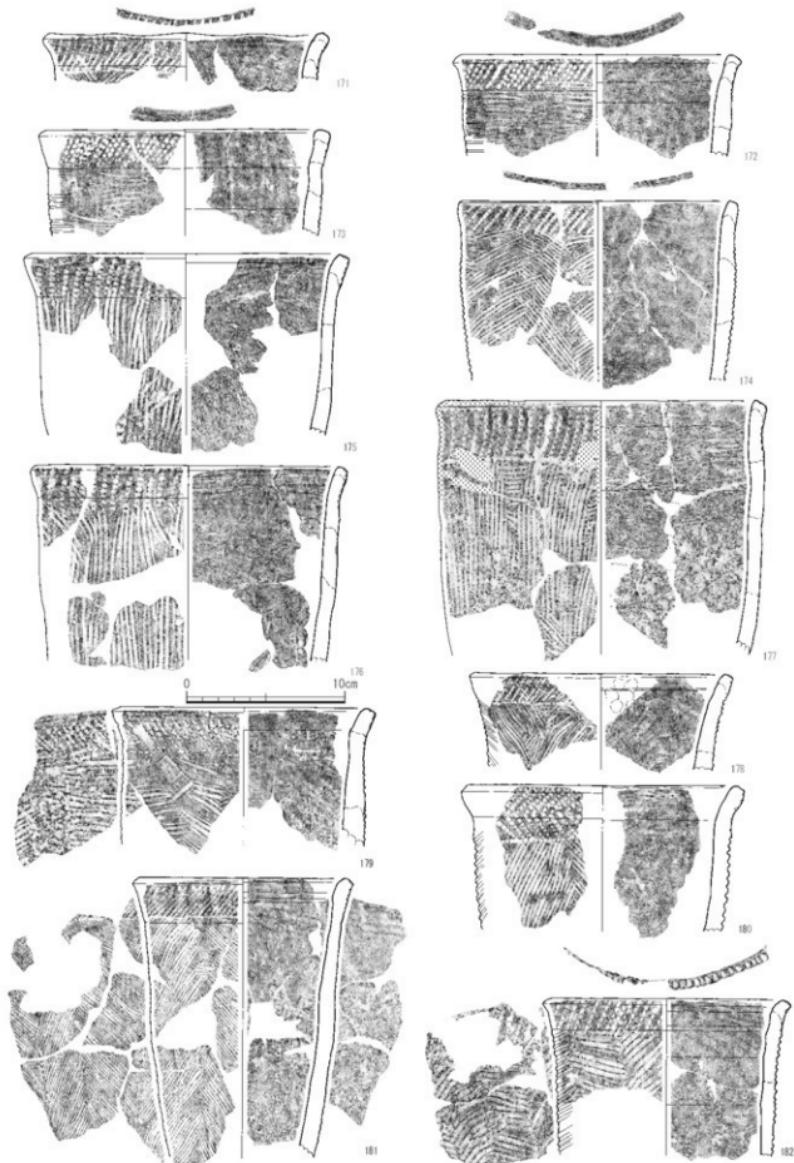
第222図 純文早期土器実測図 (24) (3.121群土器/桐木調査区出土)



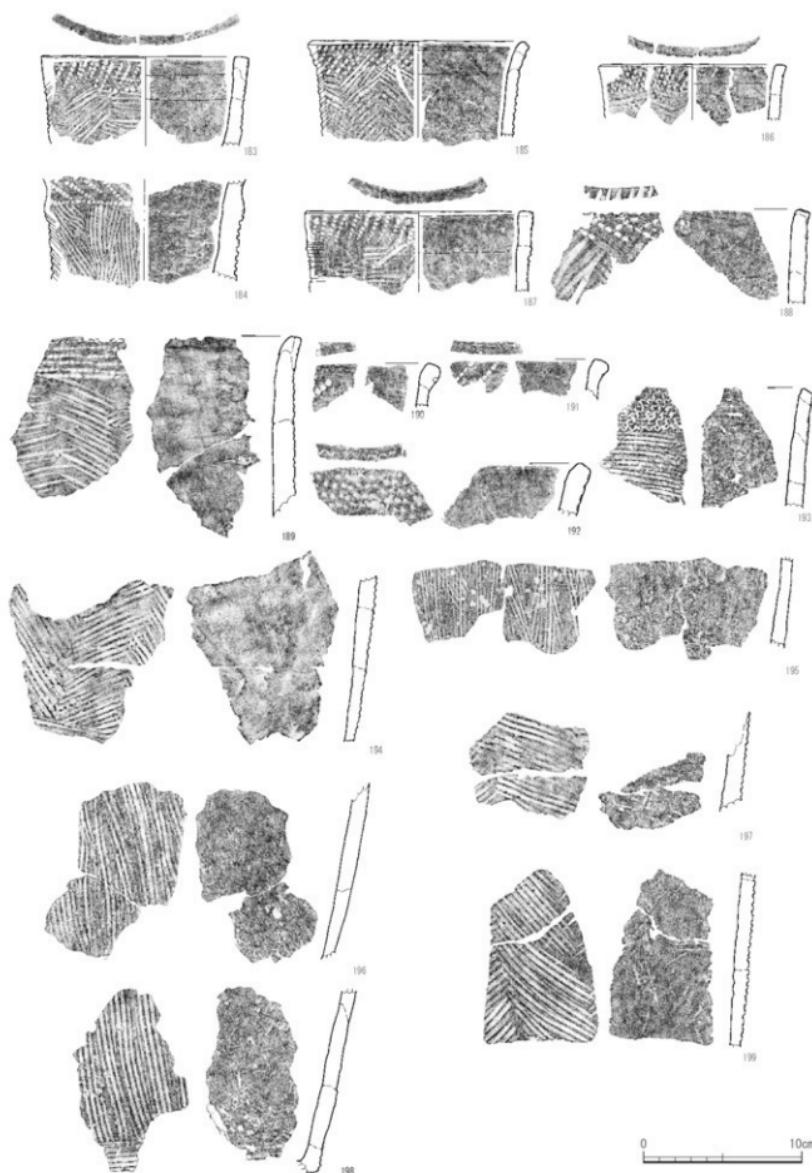
第223図 純文早期土器実測図 (25) (3. 121群土器/3. 122群土器/桐木調査区出土)



第224図 總文早期土器実測図 (26) (3. 122群土器/桐木調査区出土)



第225図 純文早期土器実測図 (27) (3. 123群土器/桐木調査区出土)



第226図 純文早期土器実測図 (28) (3.124群土器/3.125群土器/桐木調査区出土)



第2種土器(分類記号3.112、第221図152～156)は、口径25cm前後、胴部最大径20cm前後、底径15cm前後を測る円筒形深鉢形土器である。

さて、出土分布図から本タイプに属する土器は主に、桐木調査区北側地区的うち、特に桐木調査区C～E-10・11区周辺に集中していることを指摘できる(第213図・第216図～第219図参照)。この範囲は第3群土器第1類土器のなかでは最も狭く、注目できる。

第3群土器第1類土器第2タイプ土器(分類記号3.12、第222図～第226図157～199)

第3群土器第1類土器第2タイプ土器は、第3群土器第1類土器のうち、口縁部が外に聞く器形の土器である。

器形的特徴としては、口唇端部形態が平坦面を形成し、胴部最大径が胴部上端に位置し、胴部がほぼ直線的になる円筒形土器であることが挙げられる。

施文的特徴としては、口唇上端部には斜位方向の刻みを連続して巡らし、口縁部文様帶には貝殻刺突文を縦位方向や斜位方向に施すことが指摘できる。縦位方向に施す例としては第222・223図157、158、162などが挙げられ、斜位方向に施す例としては第223図～第225図161、168、181などがある。

また、口縁部文様帶と胴部文様帶との境には、貝殻刺突文を横位方向に1条巡らし、胴部文様帶には貝殻条痕文による絞杉文や羽状文を縦位方向に施すことを挙げられる。そして胴部下端部には、貝殻条痕文を斜位方向や横位方向に巡らするのが特徴である。

ここで注目できるのは、胴部文様帶の文様構成である。本群土器の代表的な指標は、胴部文様帶の「絞杉文」である。この文様構成は、厳密には「羽状文」である。しかし、貝殻による工具1単位毎に施される羽状文の交差する部分が、まるで1本の輪のように見えるほど厳密に施されているところから、「絞杉文」といわれる。第3群土器第1類土器第1タイプ土器では、大部分の土器を「絞杉文」の範疇に入れることができる。これに対して、第3群土器第1類土器第2タイプ土器では、多くの土器は貝殻による工具数単位毎に交互に施される「羽状文」であるか、あるいは胴部上端部のみに交差部があり、胴部下半部では縦位垂下文である。したがって第2タイプ土器には、「絞杉文」の範疇に入ることのできる土器は少ないことが、指摘できる。

調整方法としては、内器面では、口縁部から底部にかけて直前調整として木製工具によるハケ調整を行った後に、箆状工具もしくは木製工具による横位方向、あるいは斜位方向のナデ調整、あるいは丁寧なナデ調整を最終調整としている土器が多数を占めた。

また点数的には少数であったが、ミガキ調整を最終調整として行う土器も中には見受けられた。これに対して、ケズリ調整の痕跡が観察できる土器は少なかった。

本タイプ土器の胎土中鉱物は、主に角閃石や輝石などで構成され、特に角閃石を含有する点数が多いこと、細かい粒度の鉱物だけでなく粗い粒度の鉱物が含まれる土器も多いこ

とは、第3群土器第1類土器第1タイプ土器と同様である。

ここでは、黒雲母を含有する土器の割合が第1タイプ土器よりも高いことが注目できる。

また本タイプ土器は、径の大きさの違いから4種に形式分類することができた。すなわち、

第1種土器(分類記号3.121、第222・223図157・158、第223図165・166)は、口径30cm前後、胴部最大径25cm前後、底径20cm弱を測る土器である。

第2種土器(分類記号3.122、第223図159～164、第224図167～170)は、口径25cm前後、胴部最大径20cm強～25cm弱、底径15cmを測る土器である。

第3種土器(分類記号3.123、第225図171～182)は、口径20cm前後、胴部最大径15cm強～20cm弱を測る土器である。

第4種土器(分類記号3.124、第226図183～188)は、口径15cm強、胴部最大径10cm強～15cm弱を測る土器である。

以上の4種類であった。なお径を測ることのできなかった土器片は、第5種土器(分類記号3.125、第226図189～199)に分類した。

これらの形式差は、先に示した器形的特徴、施文的特徴、調整方法、胎土中鉱物などの諸属性とのいずれの間にも高い相関関係はみられないかった。このことから、この形式差が同一型式内のセットであると、指摘できることを示している。

さて、出土分布図から本タイプに属する土器は主に、桐木調査区北側地区的うち、特に桐木調査区B～I-6～11区周辺に集中していることを指摘できる(第214図・第216図～第219図参照)。この範囲は第3群土器第1類土器のなかでは最も密集して出土しており、注目できる。

第3群土器第1類土器第3タイプ土器(分類記号3.13、第227図～第234図200～256)

第3群土器第1類土器第3タイプ土器は、第3群土器第1類土器のうち、口縁部が直行する器形あるいは胴部最大径が口径よりも大きくなる器形の土器である。

器形的特徴としては、口唇端部形態には平坦面を形成する土器と、丸味を帯びた土器とがあることが指摘できる。また、胴部最大径が胴部上端に位置し、胴部形態が直線的になることを挙げることができる。

ここで注目できるのは、次の2点である。

第1は、このタイプに属する土器のなかには、口縁部に瘤状突起を2方向に貼付する土器が現れることがある。瘤状突起には、口唇上端部を上限として断面形で口縁部から横に張り出すタイプと、口唇上端部にかぶせるように断面形で斜め上方に張り出すタイプがある。特に張り出すタイプの土器は、見かけ上、口縁形態は波頂部が2つある波状口縁を呈する土器に比せられ、このことは重要である。

第2は、第234図249・250の瘤状突起片である。これらの土器が特異的であるのは、突起部を横位方向に貫通した直径5mmほどの穿孔が、棒状工具による焼成前に施されている点である。他の瘤状突起にはみられず普遍的でないため、

穿孔の用途など不明であり、注目できる。

施文的特徴としては、次の5点を挙げることができる。

まず第1には、口唇上端部には縦位方向に貝殻あるいは木製工具による刻みを連続して巡らすのが特徴である。

また第2には、口縁部文様帶には貝殻刺突文を縦位方向(第227図～第229図206, 210, 217など)や横位方向(第227図・第229図～第231図208, 223, 225, 227など)あるいは斜位方向(第227・228図209, 211, 第231図230など)もしくは羽状(第227図201, 第229・230図220, 226など)など様々な方向に施すという種類の豊富な土器であることが挙げられる。

さらに第3には、第3群土器第1類土器第2タイプ土器で主体的に観察できた、口縁部文様帶と胴部文様帶との境に貝殻刺突文を横位方向に1条巡らす手法は、第3タイプ土器では少量であった。

第4には、胴部文様帶に貝殻条痕文による綾杉文や羽状文を縦位方向に施すことが挙げられる。第3群土器第1類土器第3タイプ土器では、第3群土器第1類土器第1タイプ土器で主体的な、「綾杉文」が施される土器が量的に多かった。これに対して、第3群土器第1類土器第2タイプ土器で主体的な、「羽状文」が施される土器は量的に少なかった。

また第5には、胴部下端部に貝殻条痕文を斜位方向や横位方向に施す土器が観察できるのが特徴である。

調整方法としては、内器面では、口縁部から底部にかけて木製工具によるハケ調整を行った後に、箇状工具もしくは木製工具による横位方向、あるいは斜位方向のナデ調整、あるいは丁寧なナデ調整を最終調整とする土器が多数を占めた。

また、第3群土器第1類土器第1タイプ土器では観察できず、第3群土器第1類土器第2タイプ土器では少数見受けられたミガキ調整を最終調整として行う土器は、本タイプ土器では観察できなかった。これに対して、第3群土器第1類土器第1タイプ土器や第2タイプ土器では少なかったケズリ調整の痕跡が観察できる土器は、第3群土器第1類土器第3タイプ土器ではある程度の割合を占めた。

本タイプ土器の胎土中鉱物は、主に角閃石や輝石などで構成される土器が多いことを特徴とする。また、黒雲母が含有される土器は第3群土器第1類土器第1タイプ土器や第3群土器第1類土器第2タイプ土器よりもかなり高い割合を占めることも挙げができる。

また、鉱物の粒度では粗い粒度の鉱物が含まれる土器の割合は第1タイプ土器や第2タイプ土器よりもかなり低く、細かい粒度の鉱物で構成される土器が多いことが指摘できる。

また本タイプ土器では、径の大きさの違いから3種に形式分類することができた。すなわち、

第1種土器(分類記号3.131, 第227図～第229図200～217, 第230図224～226)は、口径25cm強～30cm弱を測る土器である。

第2種土器(分類記号3.132, 第229図218～223, 第231図～第232図227～238)は、口径20cm強～25cm弱、底径15cm強を測る土器である。

第3種土器(分類記号3.133, 第233図～第234図239～256)

は、口径15cm強～20cm弱、底径10cm弱を測る土器である。

第3群土器第1類土器第1タイプ土器や第2タイプ土器と同様に、第3タイプ土器でもこれらの形式差は、先に示した器形的特徴、施文的特徴、調整方法、胎土中鉱物などの諸属性とのいずれの間に高い相関関係はみられなかった。このことは、この形式差が同一型式内のセットであると、とらえられることを示している。

さて、出土分布図から本タイプに属する土器は主に、桐木調査区北側地区的うち、特に桐木調査区C～I-6～13区周辺に集中していることを指摘できる(第215図～第219図参照)。この範囲は第3群土器第1類土器のなかでは最もまさに出土しており、注目できる。

第3群土器第1類土器第4タイプ土器(分類記号3.14, 第236図266・267)

第3群土器第1類土器第4タイプ土器は、第3群土器第1類土器のうち、口縁部が内窓する器形の土器である。

器形的特徴としては、口縁形態は平口縁を呈し、口唇端部形態は内傾する平坦面を形成し、胴部形態は若干ふくらみ、底部は平底を呈する土器であることが挙げられる。胴部最大径が胴部上部に位置する円筒形土器である。

施文的特徴としては、分類できた2点の資料共に、口唇上端部には文様を施さず、口縁部文様帶には貝殻刺突文を横位方向に4条巡らし、胴部文様帶には貝殻条痕文による綾杉文を縦位方向に施す土器であることが挙げられる。胴部下半部から底部にかけては接合資料がないため不明である。

調整方法としては、内器面では、口縁部から底部にかけてケズリ調整の後に粗いナデ調整を行う土器や、木製工具によるハケ調整を行った後に、箇状工具もしくは木製工具のナデ調整を行う土器が観察できた。

本タイプ土器の胎土中鉱物は、主に黒雲母と粗い粒度の鉱物とで構成される土器が多いことを特徴とする。胎土中に黒雲母が含有される量は多く、混和材として含ませた可能性が高いことが指摘できることは、第3群土器第1類土器のなかでは特異的である。

本タイプに属する土器は、本遺跡では出土点数が2点と極めて少なく、特徴を網羅することは困難である。しかしながら、器形的特徴としては第5群土器と共通する土器であることから、今後注意を要する土器である。

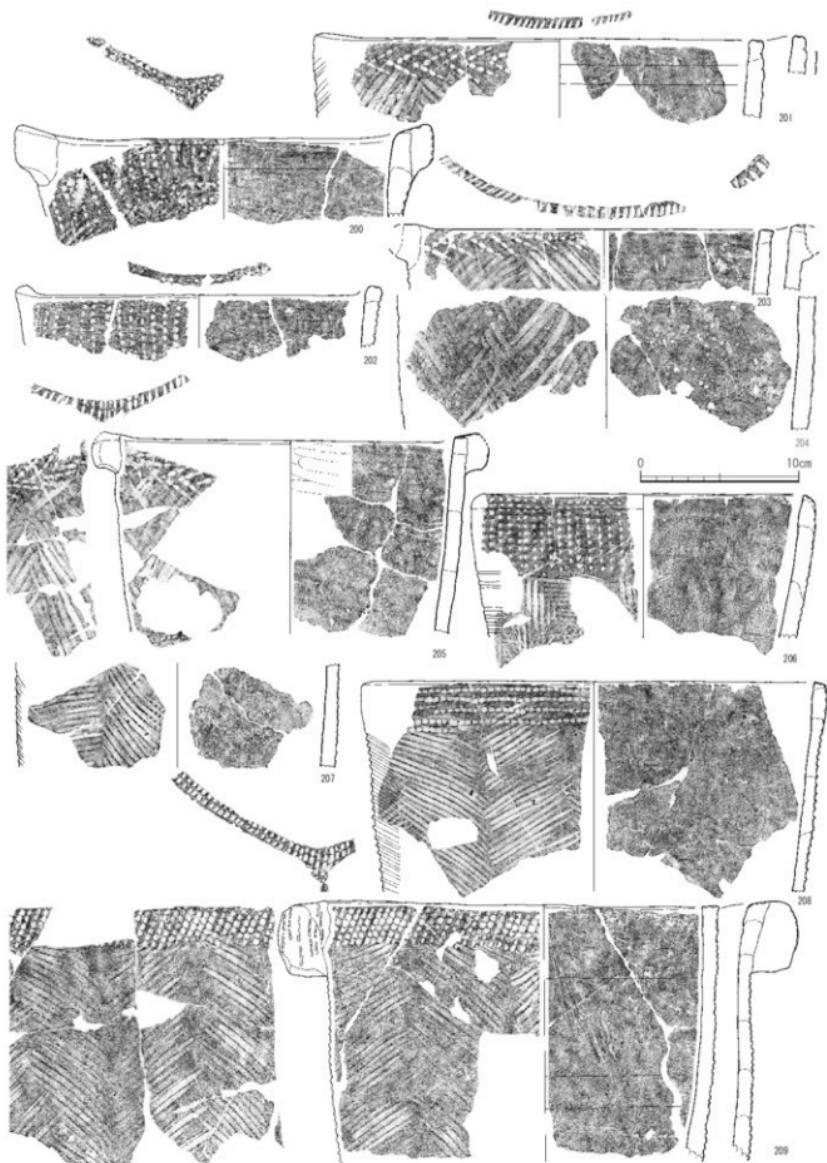
第3群土器第2類土器(分類記号3.2, 第237図268～272)

第3群土器第2類土器に属する土器を5点資料化した。

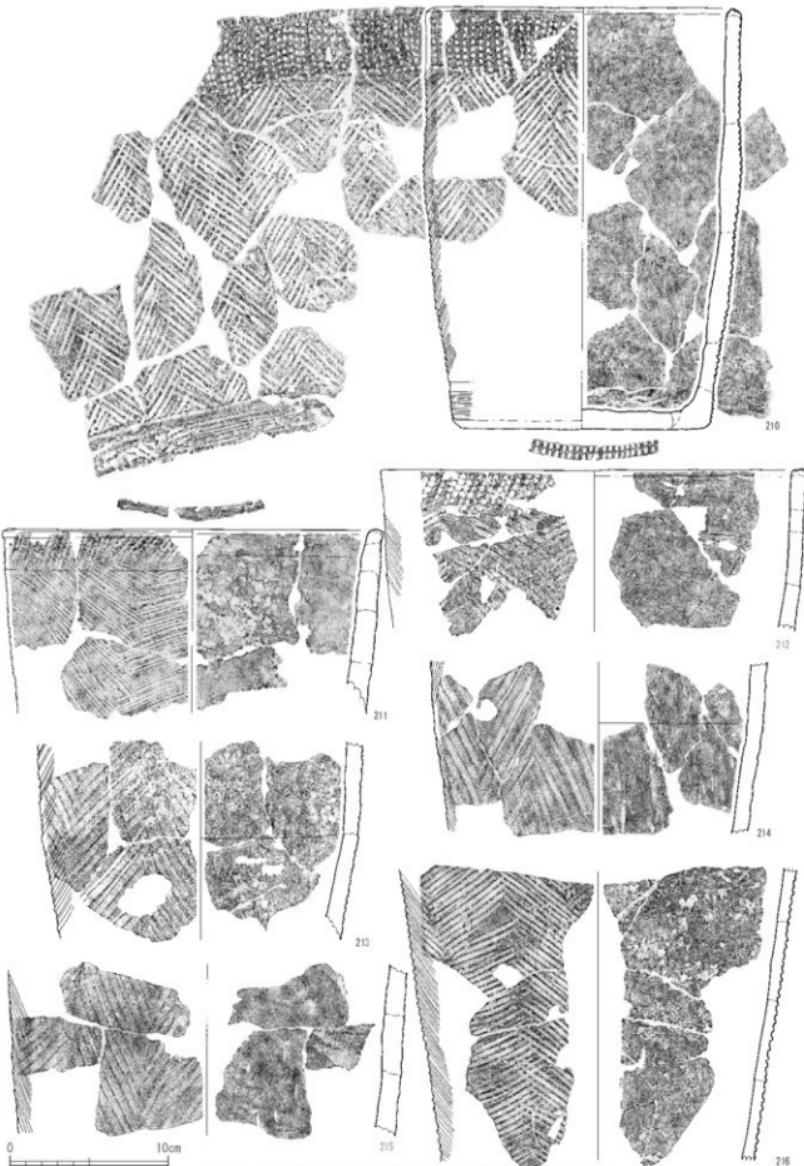
器形的特徴としては、口縁部は直線的に外に開き、胴部は底部にかけて緩やかにすぼまる円筒形で、底部は平底を呈することが挙げられる。このうち口唇部形態には、上端部が丸く舌状を呈する器形と、上端部が平坦部を形成する器形とが本遺跡から出土した。

施文的特徴としては、2種類の土器を指摘できる。

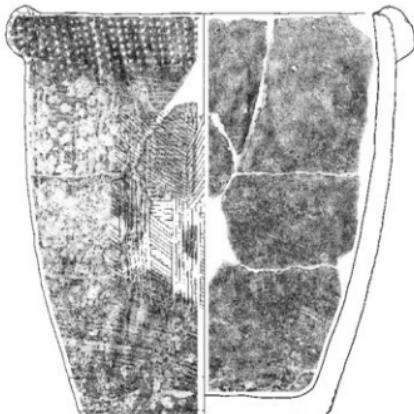
第1は、口縁部文様帶には斜位方向の貝殻条痕文を連続し



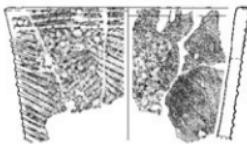
第227図 總文早期土器実測図 (29) (3.131群土器/桐木調査区出土)



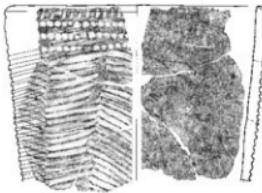
第228図 純文早期土器実測図 (30) (3.131群土器/桟木調査区出土)



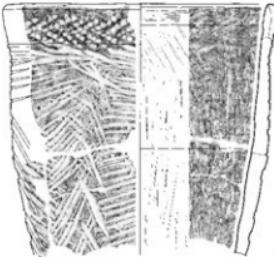
217



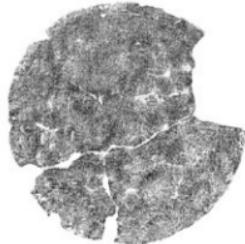
218



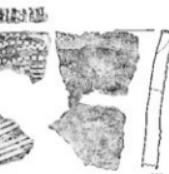
219



220



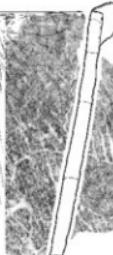
221



222

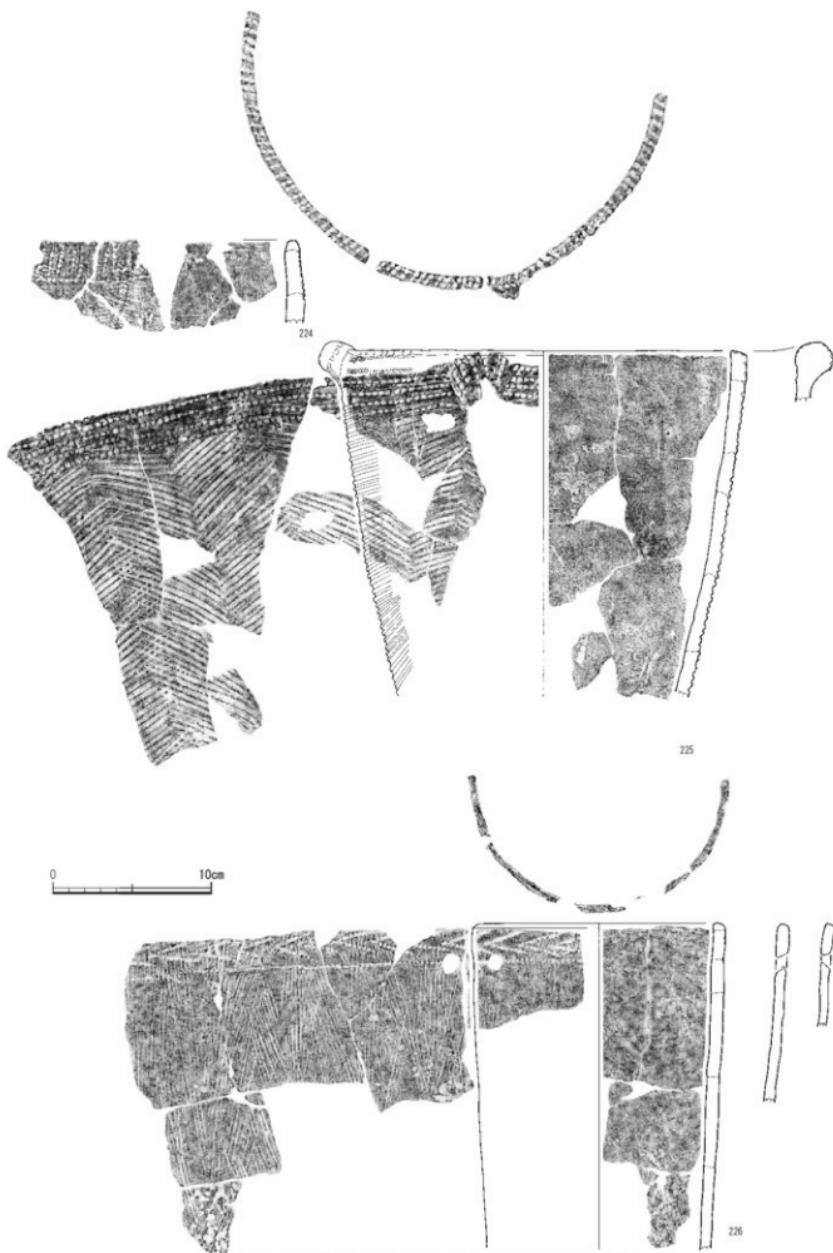
0

10cm

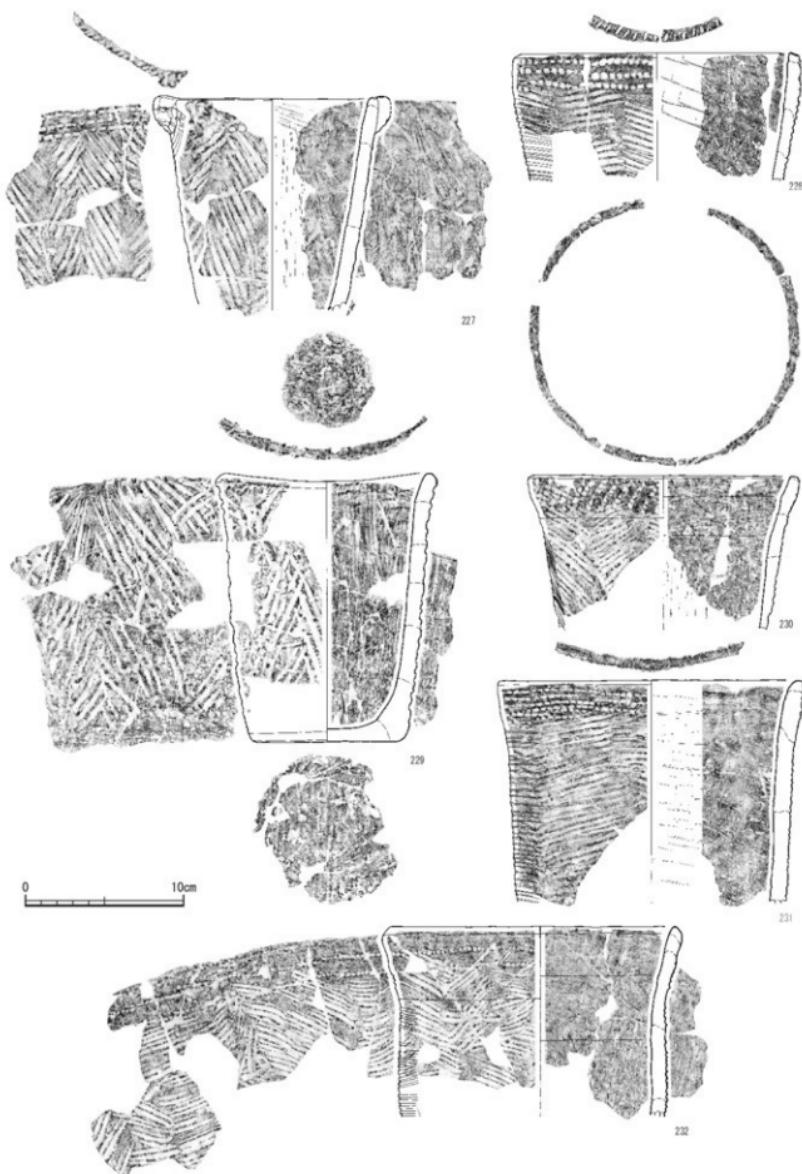


223

第229図 縄文早期土器実測図 (31) (3.131群土器/3.132群土器/桐木調査区出土)



第230図 縄文早期土器実測図 (32) (3.131群土器/柵木調査区出土)

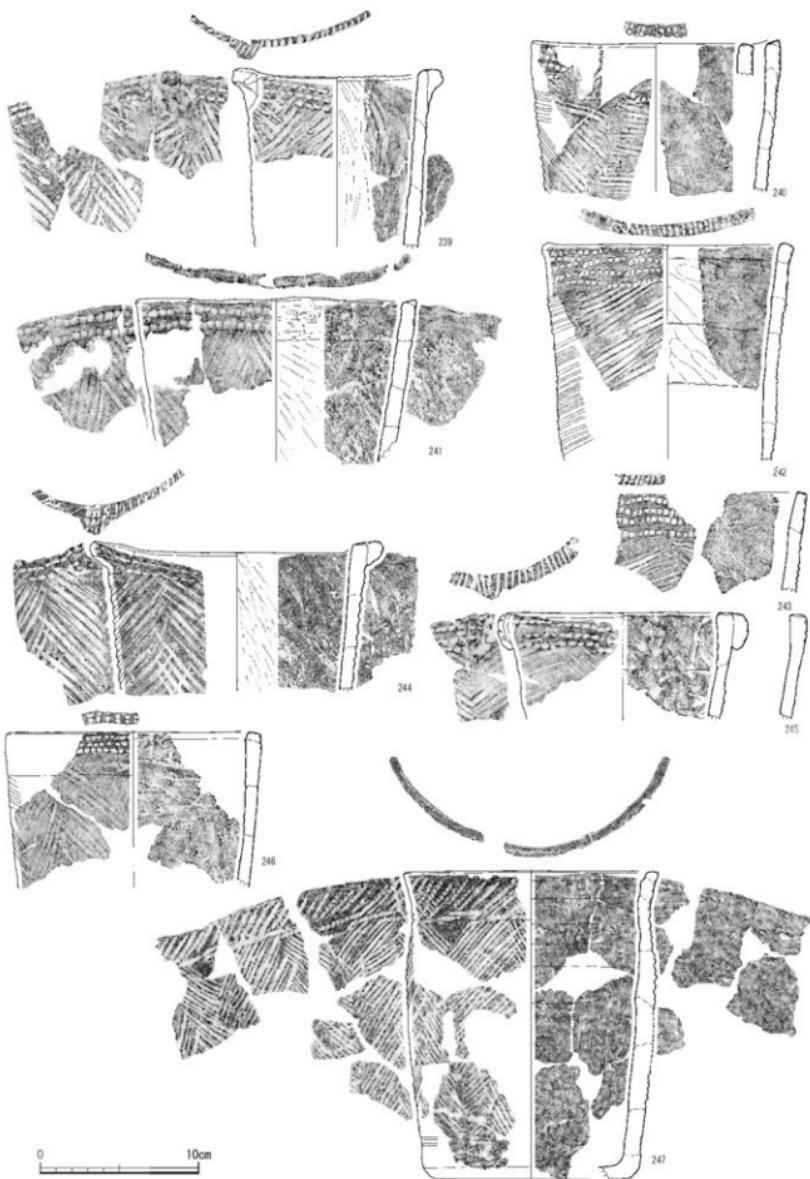


第231図 縄文早期土器実測図 (33) (3. 132群土器/桐木調査区出土)

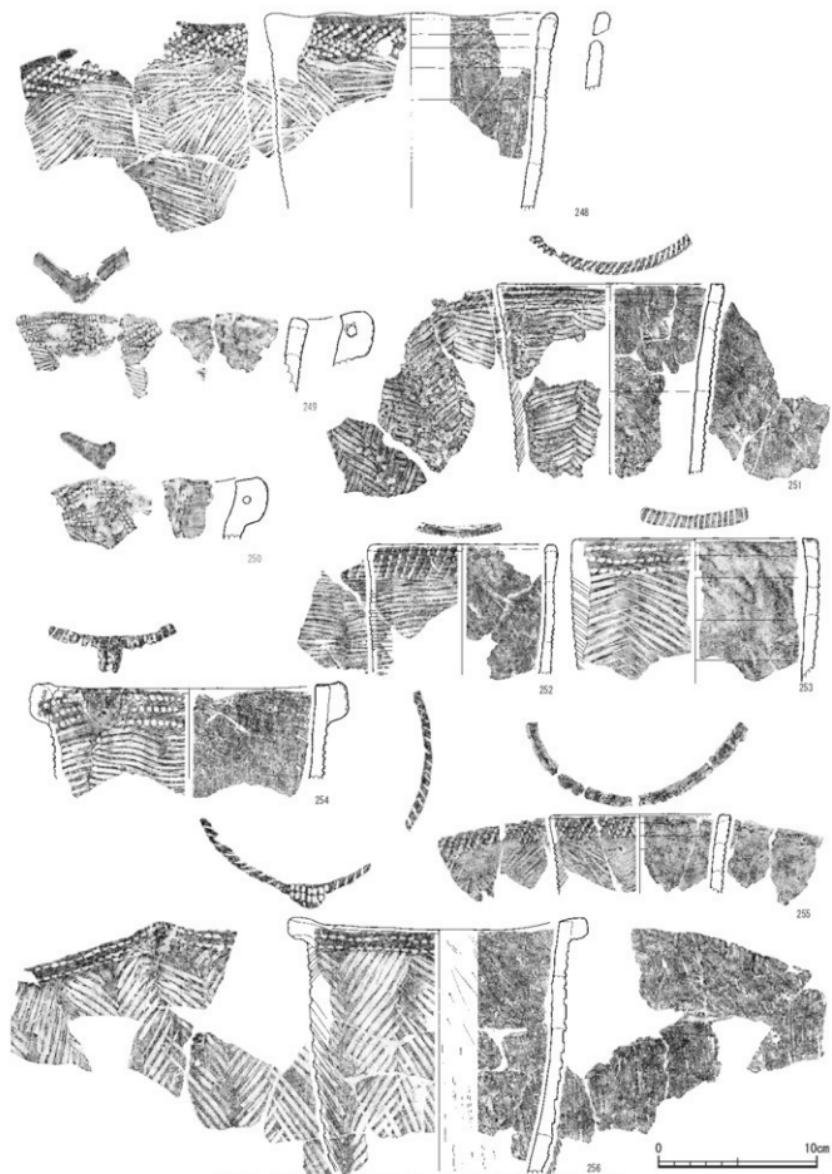
第57表 縄文早期土器觀察表 (15) (3群土器-5)

第58表 縄文早期土器観察表 (16) (3群土器-6)

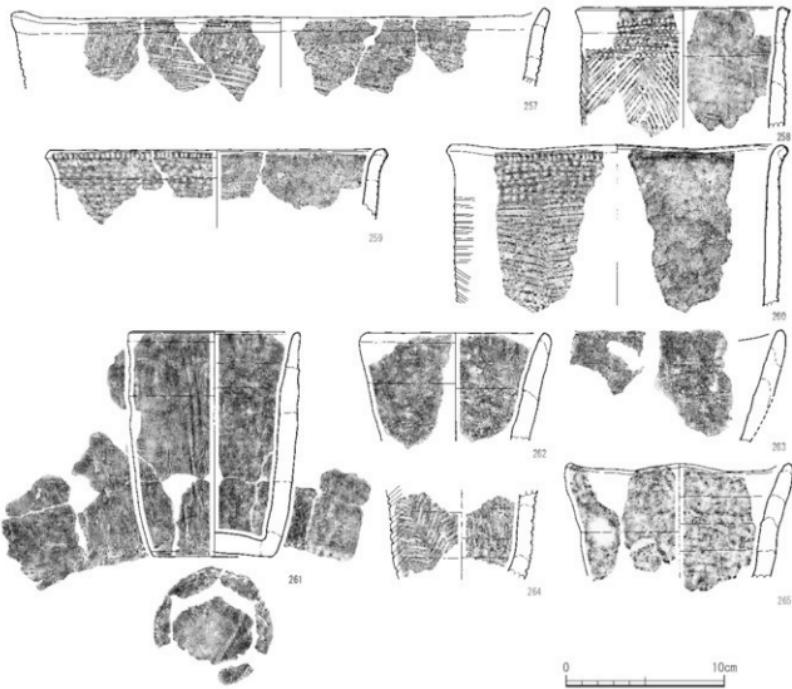




第233図 純文早期土器実測図 (35) (3.133群土器/桟木調査区出土)



第234図 縄文早形土器実測図 (36) (3. 133件土器/桐木調査区出土)



第235図 縄文早期土器実測図 (37) (3.4/3.51群土器/桐木調査区出土)



第236図 縄文早期土器実測図 (38) (3.14群土器/桐木調査区出土)

で巡らし、胴部文様帯には胴部下端部まで貝殻条痕文を縦位方向に施すのが特徴である。

第2は、口縁部文様帯から胴部文様帯にかけて胴部下端部まで貝殻条痕文を縦位方向に施すのが特徴である。

調整方法としては、内器面では、口縁部から底部にかけて木製工具によるハケ調整を行った後に、横位方向あるいは斜位方向のナデ調整を最終調整としている土器の多いのが特徴である。また、最終調整として胴部に斜位方向の貝殻条痕文を施す土器も観察できた。

本類土器の胎土中鉱物は、主に角閃石などで構成され、鉱物の粒度では粗い粒度の鉱物を多く含む土器と、細かい粒度の鉱物を多く含む土器とに分かれることが注目できた。

第3群土器第3類土器(分類記号3.3、第238・239図273~278)

第3群土器第3類土器に属する土器を6点資料化した。

器形的特徴としては、口唇端部に外傾する平坦面を形成させ、胴部最大径が胴部上半部に位置し、胴部にかけて緩やかにすぼまる円筒形土器であることが挙げられる。本類に属する底部と接合できず、底部の形状は不明である。

施文的特徴としては、口唇上端部には横位方向の貝殻刺突文を2条連続して巡らし、口縁部文様帯には貝殻刺突文を斜位方向に施し、口縁部文様帯と胴部文様帯との境には貝殻刺突文を横位方向に1条巡らすことが挙げられる。

また、胴部文様帯には貝殻条痕文による絞文形や羽状文を縦位方向に施した上に、斜格子状の貝殻刺突文を重ねて施すという特徴が本類土器を細別した分類基準のうち、最大の指標である。

ここで特に注目できるのは、本類土器の貝殻条痕文は、工具1単位毎に施される羽状文の交差する部分があるで1本の輪のように見えるほど緻密に施されている「絞文形」部分と、工具数単位毎に交互に施される「羽状文」部分とが、同一個体内に観察できることである。

以上の特徴から本類土器は、器形的特徴や口縁部文様帯における施文的特徴など、第3群土器第1類土器第2タイプ土器の特徴と共に通す点が多いことが、まず指摘できる。さらにその上で、胴部文様帯において「二重施文」を施すなど文様構成などに特異的な特徴も多いため、本報告では細別を試みた。今後注意を要する土器である。

第3群土器第4類土器(分類記号3.4、第235図257~260)

第3群土器第4類土器に属する土器を4点資料化した。

器形的特徴としては、第3群土器第1類土器第2タイプ土器の指標である。口縁部が外に開く器形を呈するが、口唇部内部と口唇上端部と口唇外部とにそれぞれ箇状工具による平坦面を作出させていることが異なる特徴として指摘できる。この特徴こそが本類を細別した最大の指標である。また特に、口唇上端部に外傾する平坦面を作出する点は、第3群土器第3類土器と共通する特徴である。胴部形態は、第3群土器第1類土器第2タイプ土器と同様、ほぼ直線的になる円

筒形を呈している。

施文的特徴としては、口唇端部には刻みを連続して巡らし、口縁部文様帯には貝殻刺突文を斜位方向に施す土器(第235図257)や横位方向に数条施す土器(第235図258~260)がみられることが指摘できる。また口縁部文様帯には、貝殻刺突文を施文後にナデ調整を施し、文様をつぶしている特徴が挙げられる。この特徴は、第6群土器第1類土器第1タイプ土器と共通する手法であり、他の群ではみられない特徴であることを特に指摘しておく。さて胴部文様帯には第3群土器第1類土器第2タイプ土器と同様、貝殻条痕文による絞文形や羽状文を縦位方向に施していることが挙げられる。

また調整方法については、特に257・258では口縁部内面を横位方向に箇状工具による調整を行うことで、口縁部内面と胴部内面との境にわずかな段差を生じさせていることが注目できる。

以上の特徴から本類土器は第3群土器第1類土器第2タイプ土器と共通する特徴が多いものの、器形的特徴や口縁部文様帯における施文的特徴など第3群土器第1類土器から第3類土器の中に分類するには特異な特徴も多いため、本報告では細別を試みた。今後注意を要する土器である。

第3群土器第5類土器(分類記号3.5、第235図261~265)

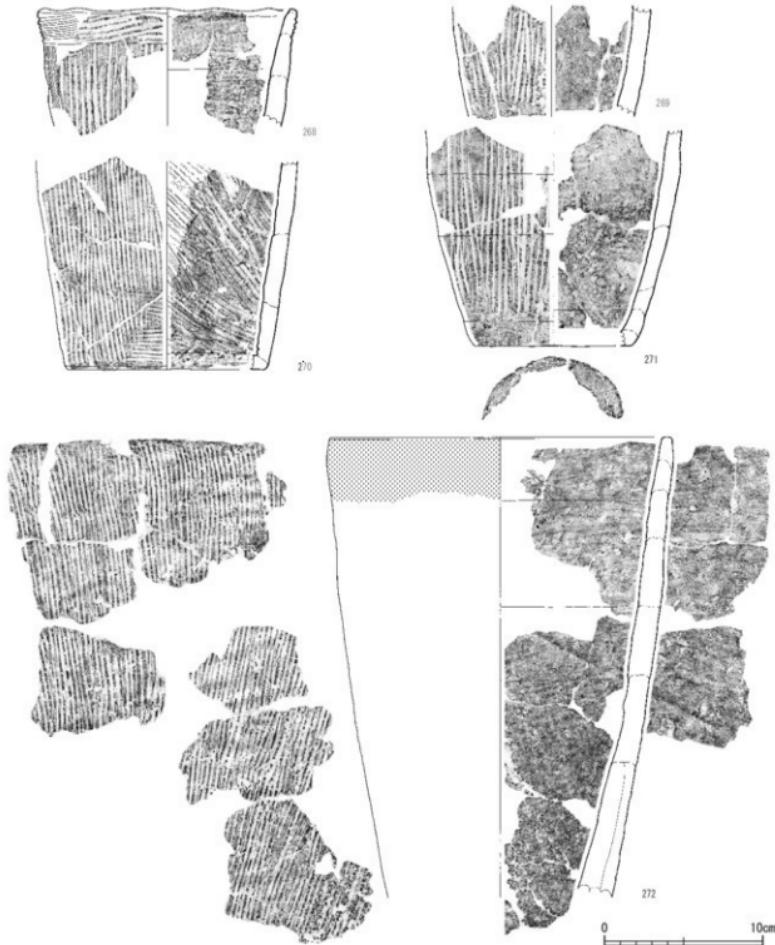
第3群土器第1類土器から第4類土器までに帰属できない特徴を有する土器を、第5類土器に帰属させた。

261は、無文の深鉢形土器である。口縁部や底部の製作技法などの器形的特徴や、調整方法や胎土中鉱物などの他の諸属性から、第3群土器に帰属すると判断した。器形的特徴などからは第3群土器第1類土器第3タイプ土器の有文土器に対応する無文土器であると考えられる。第3種土器よりも更に一回り小型の土器である。

262、263、265は無文鉢形土器で、調整方法や胎土中鉱物などから、第3群土器に帰属すると判断した。器形的特徴としては口縁形態に2種類有り、262は平口縁を呈し、263、265は波状口縁を呈することが挙げられる。

264は有文鉢形土器である。胴部文様帯の文様構成は、この土器が第3群土器に帰属することを示している。器形的特徴としては胴部下半部において緩やかな屈曲部があることが第3群土器のなかでは特異的な点として指摘できる。

鉢形土器は本遺跡では他に例が無く、特異的であり、今後注意を要する土器である。



第237図 縄文早期土器実測図(39) (3.21群土器・桐木調査区出土)

第61表 縄文早期土器観察表(19) (3群土器-9)

規格 No.	面	分類	鉢上No.(チコト番号)	地土	調査(内)	調査(外)	備考
237 268 3.21		丸、縦、谷粒	圓ハナテ		口唇部-ヘラナ テ、ヘラナテ	-	
			C09442(3-7面)				
			C09443(3-7面)				
			C06391(3-1面)				
237 269 3.21		丸、縦、谷粒	テ				
			C09444(3-7面)				
			C09445(3-7面)				
237 270 3.21		丸、縦、谷粒	筒型多頭斜形イカツリ		-	-	
			C06641(3-7面)				
			C06905(3-7面)				
			C03755(3-7面)				
237 271 3.21		丸、谷粒	圓ハナテ		本加工用カタ	-	
			C06374(3-7面)				
			C04877(3-6面)				
			C04000(3-6面)				
			C02085(3-6面)				
			C06726(3-6面)				
			C06868(3-6面)				

第62表 縄文早期土器観察表(20) (3群土器-10)

規格 No.	面	分類	鉢上No.(チコト番号)	地土	工具ケースビニテ	備考
			C05176(3-10面)	角、砂粒		深削れ、角質化 外表面付着、 外表面付着
			C05374(3-10面)			
			C03694(3-10面)			
			C02665(3-10面)			
			C02666(3-11面)			
			C03695(3-11面)			
			C02732(3-10面)			
			C07008(3-10面)			
			C07009(3-10面)			
			C07010(3-10面)			
			C07011(3-10面)			
			C07012(3-10面)			
			C07013(3-10面)			
			C07014(3-10面)			
			C07015(3-10面)			
			C07016(3-10面)			
			C07017(3-10面)			
			C07018(3-10面)			
			C07480(3-10面)			
			C07481(3-10面)			
			C07482(3-10面)			
			C07483(3-10面)			
			C07484(3-10面)			
			C07485(3-10面)			
			C07486(3-10面)			